
学園戦記譚

チーム カルテット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園戦記譚

【Nコード】

N19870

【作者名】

チーム カルテット

【あらすじ】

異世界への扉が開くようになってから暫く。世界は第三次世界大戦の名残を窺わせない平穏に包まれていた。コインの表裏のように、平穏な表舞台の裏で、今日も少年少女達の命を賭けた“戦い”が繰り広げられる――

プロローグ

——西暦二一世紀末、二千XX年。

世界は第三次世界大戦の渦中にあつた。歴史は繰り返す、とは誰が言つた言葉であつたろうか。

“代理戦争”というものを知っているだろうか？

人類とは闘争の歴史ではあるが、また同時に多くを学んできた。その形のひとつが代理戦争。列強に連なる国が他の弱小国を利用し、物資や資金を裏から手配することで代わりの戦争地と成す。

人は歴史を繰り返す。しかし、同時に学ぶ生き物でもある。

核の恐怖。戦火の痕。すべては既に過去のものであつたが、それでもその痛みは受け継がれていた。

——ならば、被害の小さな地で戦争をすればいい。

誰が言い出した言葉であつたかは問題ではない。結局その提案により、第三次世界大戦は勃発してしまったのだから。

当時の日本は限界であつた。

度重なる他国との摩擦、内部腐敗。

軍事縮小の結果、招いてしまった事態。無能な総理大臣。汚職の数々。

肥え太っていく国の借金、増えるのは税金、疲弊するのは国民。

二一世紀初頭、巻き起こった恐慌が収まり、回復の階きざしを上り、到達したのは再びの“バブル”。

そして訪れる崩壊。パラダイムシフトは足音を立てて忍び寄っていた……

技術大国とは既に過去の栄華。今ではアジア諸国に技術で追いつ

かれてしまい、生産量でも先を越されてしまった日本。
後が無かった――

大恐慌により世界各国は大打撃を受ける。

切欠はテロであつた。相次ぐリストラにより、増えた浮浪者。流れ出した他国の密輸武器。発生したのは世界各国でのテロ活動。疲弊した国の対処は遅い。ついに巻き起こつた観光者殺害の記事。日本だけではない、各諸国でも同じような事が相次いだ。経済は大打撃の影響で生産ラインが一部根絶。治安も悪化の一途を辿っていた。

もう一度言おう。

日本に後はなかった。

行われたのは秘密裏の増札。各国に気づかれるより早く、物資を輸入し拡大される軍事。

――退路はなかった。

このことが明るみになれば、日本の紙幣の価値は半分以上にまで下がることだろう。

それでも後が無かつた……溜まりに溜まつた負債の数々、負の遺産は既にまともな手法で返済など不可能であつたのだ。

そして、時を同じくして秘密裏に行われた協定。

ヨーロッパ諸国との軍事締結。不干渉協定。

同じことを考えていたのは日本だけではなかった。

アメリカもまたこの機に……と考えていた国の一つである。

日本、アメリカ、ドイツやイギリスにフランス、その他様々な国が一斉に、各自の思惑の下に戦火の狼煙を世界に轟かせた。

しかし、これに戸惑ったのは狼煙を高々と上げた筈の国々である。彼らは過去の悲惨な結末を記録としてだが知っていた。

だからこそ、集まった緊急サミット。

世界連合の場で誰かが囁いた。

——代理の地を立てればよい。

悪魔の如き誘惑。広がる賛同の声。

こうして、幾つかの条約が結ばれた後、アフリカの地を舞台に、第三次世界大戦はその咆哮を轟かせた。

表面上は平和な社会が保たれる裏で、アフリカは地獄の地として阿鼻叫喚の様子をみせる。

次々と投入される戦略、戦術兵器の数々。核こそ使われないものの、凶悪さでは肩を並べるような物ばかり。

忌避されていたガス系兵器すら投入される戦場。そこに命の尊さなど欠片もなく、その重さはきつと一枚の硬貨より軽い。

散って行くのはその国の民が大半であった。各国は資金と物資で見えない糸を操るが如く。

繰り返される非人道的な行為、研究。

その場に最早モラルなんて言葉は存在せず、この世の“悪”が犇くコドクの坩堝であった。

そんなおり、世界に一齐に発信されたとある通信。

——化け物が現れた。

当初は歯牙にもかけなかった通信であったそれは、続々と寄せられ増えていく報告に、遂に各国が一時停戦を結んでまで調査が行わ

れることとなる。

結果。事実“化け物”は存在した。空間が揺らぐ不可思議な場、その向こうからやってくる“異形の生物”。

誰かが言った「あれは、ゴブリンじゃないのか」と。

そう、出現し、被害を拡大させていた生物は、御伽噺やゲームの中で語られるような生物達であったのだ。

原因が判明したのはそれから数カ月後。

某国の戦争を有利にする為の研究。本来なら越えることの出来ない壁、それを越える現象。

即ち、トンネル効果を利用した空間の超越技術の研究。

その成果は確かに世界に知られることとなる。

“暴走”という結果で……

研究は失敗。世界を一夜にして覆った特殊な電磁波形は、あっという間に世界の理を侵し、繋がってはいけない世界への扉を開いてしまう。

結果。皮肉にも戦争を混乱化させる為の技術は、世界共通の危機を招き、それにより各国は強制的に矛を収める他なく、第三次世界大戦は終結したのだ。

——それから数年。

空間の歪みに関する調査が進み、その研究を行った国。

つまりは日本が責任を負うこととなり、完成した技術により特殊な波形の電磁波が世界に向けて発信。

これは電子機器に影響は与えずに、空間の不安定を安定化する作用を持つ。

完全な完成した技術ではないそれは、代償として四国を丸々犠牲とすることになる。

この技術。つまりは、世界全体に広がった異常を四国という地に集束してしまうものであった。

同時、空間の歪みの向こう。

“異世界”より流れ込んだ不可思議な要素。

“魔素”により世界各国で超能力にも似た、あるいはファンタジックな魔法とも言える様な、そんな特殊な力に目覚める者が現れ始めた。

これにより現代兵器では傷を負わせられない、特殊な化け物にも対抗手段ができ、一時は壊滅的であった軍が生命の息吹を吹き返す。“能力者”と、そう呼ばれる彼ら彼女らはその後の研究の過程により、魔素によって肉体的要素が変質した結果の果てに生まれた存在だと判明。

そして、その魔素による変質は十代の若者が一番多いことも判明する。

空間の揺らぎの相殺技術。

これが完成するまで、あるいは代替案が出るまでの間、世界連合の協議の結果、結界の張られた四国の東部。

淡路島に世界的能力者育成機関。通称“アカデミー”の設立を決定。

これにより、能力に目覚めたものは国から要請が出され、場合によっては強制的、あるいは能力者側から進んでアカデミーへの入学者が集まっていく。

表向き世界は平穏を取り戻したと言えるだろう。

しかし、その裏で今日もまた“アカデミー”の少年少女達はそれぞれの思いを糧に、異世界の魔物達と戦い続けている――

プロローグ（後書き）

後書き

ここまでお読み下さり有り難う御座います。

本作品は四人の作者による合作および、リレー小説となります。
各作者がこの学園“アカデミー”を舞台に、主人公を用意。
時には話を交差させながら進んでいきます。

投稿は一週間で一巡予定。

それではどうぞ、私達“チームカルテット”の初作品。
これからも宜しくお願い致します！

プロローグ担当しました。

by 作者名：アンデルセン

アンデルセン執筆 第一話（前書き）

どうも、前回から随分と経ってしまいました。
遂に完全に始動です。

のんびり更新な作品ではありますが、よろしくお願い致します！

アンデルセン執筆 第一話

世界連合傘下、ワールドアカデミー。

十年以上も前に勃発した第三次世界大戦、その渦中に起った異世界と繋がる時空間の歪みの発生。

原因は当時日本が研究していた、トンネル効果の利用による“空間”の超越。

結果は見事に暴走という、最悪の結末で幕を降ろす。

そして、その歪みの向こうからゲームに出てくるような化け物どもが現れる。

世界は恐怖のどん底に叩き落され――

なんて言うのは既に過去の話し。

現在は表上は平和な世界が運行されている。逆に戦争前より世界各国は手と手を取り合っているという、一種不気味さすら感じさせる始末。

そして裏では……少年少女達がここ、“ワールドアカデミー”でその青春たる花を散らし続けているのだがな、と男は自嘲した。

そこに男は含まれていない。青春などと言う時期は遠い昔、忘却の彼方に捨てて来たのだから。

と言うより、青春を謳歌している暇など無かったと言うほうが正解かもしれない。

日本の四国、その東北にある淡路島。そこに建設された空港もかくやという、馬鹿に広い学園の、これまた通常の数倍はあるだろうグラウンド。

そこで執り行われているのは“入学式”だ。

学園が創立されて数年目の入学式、見渡す限り精々が数十名程度。

それでも今年は多い方だと言うのだから、能力者の貴重さがうかがえるというものだろう。

校長、つまりはこの学園で、いや、この四国を取り巻く異常に対処する機関でも上層に位置するであろうお偉いさんの演説が延々と続く。

内容は君達の頑張りが未来を救うだとか、そんな発破を掛けるような言葉ばかり。

騙りは上手い、いつそ政治家に向いているのではないだろうか。見渡せば一部の生徒の瞳に信念という、偽りの炎が燃え盛っているのが見て取れる。

学園と言っても、その理由は能力者が少年少女。

主に十代前半から後半に多い、という理由と世間体を繕う為だと言っのだから笑い種である。

それは事実上の能力者に対する監視、監禁に近い。臭い物には蓋をしるとは上手い事を言っただものだ。

尤も、男もその一人であり、しかも望んでこんな場所へと来た変わり者ではあるのだが……

「——であるからして、諸君には期待している！ それぞれが切磋琢磨し、頑張ってほしい！ 以上ッ！」

思考の海に埋没している間にどうやら始業式は終わったらしく、解散の流れになりつつあった。

ここからは事前の告げられているクラスに各自で移動、という形になる。

此処にこのまま居ても仕方ないだろうと、さて多くは無選肢からどうするかと思考しようとして。

明らかに教室へと向かう道順とは違う方向へと向かう生徒を発見した。

頭に叩き込んである、未だ完全とはいえない地図を叩き起こせば、どうやら屋上に向かうらしいと判明。

だからと言って止めに行く、などと言う選択を取りはしない。

「兄様、^{にいさま}どうかありませんでしたか？」

「いや、何でもない」

「そうですか……」

背後から突如掛けられた言葉に動揺することなく、出来るだけ優しく聞こえるように振り向き様に答える。

世界で男を兄様と呼ぶ人物は、少なくともこの学園においては一人しか存在しない。

男はその存在を大事にしていた、無慮に扱うなど欠片も思いはしないだろう。

男が生きる意味の大半。それが声を掛けてきた存在なのだから。

「私達もそろそろ向かおうか冬桜^{とつか}」

「はいっ、誠治兄様^{せいじ}」

冬桜。世界で唯一の肉親たる妹、いや、義妹である存在。

また、誠治の学園への入学理由のほぼ全てに関わる存在でもある。歩き出した少し斜め後ろをついてくる冬桜。

その百五十センチにやや届かない背に対して、百八十センチを優に超す誠治。

その歩幅を出来るだけ緩やかなものにして、その身に掛かるだるう負担を軽減してやる。

腰元まで流れるストレートの艶やかな黒髪は姬カットで整えられ、その少し大きめでパツチリした瞳は能力発言の影響か、紫水晶のよくな神秘的な輝きを宿している。

細めの眉は手入れの必要のないほど整い、小さめの鼻は品よく整っており、唇は綺麗な桜色だ。

アラバスター

何より雪花石膏の如き東洋人特有の肌理細やかで、西欧人ばりの白い肌はおよそ日本人離れしており、触れることすら躊躇われる程。見た目だけの容姿で判断すれば、深窓の令嬢という言葉がこれ程似合う少女も珍しい。

学に関しても非常に優れ、今年で十六になる身ながら、その学力は既に大学院卒業レベルである。

洗濯炊事に家事一切も万能でありながら、兄様、兄様と常に慕って後ろを付いて歩く冬桜は自慢の義妹であった。

冬桜の為であるなら、と、大手の商社で勤め、それなりに立派なマンションの一室を借り二人今日まで過ごしていたのだ。

しかし、神は一も二も冬桜に与えてくれたが、余計な物までプレゼントしてくれたのは何の皮肉だろうか。

そう、彼女は生まれつき身体が常人より弱かった。

と言っても精々が人より風邪が引きやすく、こじらせやすいという程度。

神様はその代償か、超常たる力。俗に言われるESP《超能力》の才能を冬桜に授けた。

特にTK、テレキネシスに強い才能を持っていたらしく、初めて出会った当初には既にさほど重くない物体なら動かす程のものであったのだ。

尤も、その才能は決して彼女を幸せなどにしてはくれなかったのだが――

幸い、冬桜程ではないとしても、誠治の商社での才能は目覚しく、二人豊かに暮らすには問題のない金銭を得るのはそう難しくは無かった。

ただ誤算があるとすればそう、二年前より急遽強くなったESP。いや、能力のせいで冬桜の虚弱体質が悪化したことだろう。

同じく誠治の生まれつきの才能、発火能力パイロキネシスが同時期に強まり、その制御の為に商社を退社せざるをえなくなった。

ようやく掴んだ人並みの幸せが音を立てて崩壊した瞬間だ。

身体能力も急激な上昇を見せ、その能力は既にパイロキネシスと呼ぶには些か異常にすぎた。

冬桜のテレキネシスも同様であったのだが……身体能力は上がり、今はその虚弱原因であるテレキネシスによって身を守っているという、本末転倒の有様を呈している。

普通に歩いたりする分には問題はない。

激しい運動も短時間なら大丈夫だろう、しかし。明らかに悪化し

ているのもまた事実だった。

「ここが私達がこれから過ごす教室、か」

無駄に広い校舎の玄関から進み、然程奥に行かずして並んだ教室の一つ。

Aと表記された教室の前で止まる。

これから過ごすことになるだろう教室。

チラリと冬桜を見る。誠治を信じきった瞳。守らねばと改めて思う……

「兄様？」

「ん、なんでもない。私が先に入ろう、冬桜は後ろからついてくる
といい」

「はい」

ガラガラ、と。何時になっても変わる事のないタイプのドアを開け、堂々と進んでいく。

後ろにぴつたりと張り付くように冬桜が並び、教卓まで来たところで誠治が教室を見渡した。

人数は多くはなく、精々が十名と少し程度だろう。

視線が一気に集まる、一歩前に出、冬桜を庇う形で立つ。それは殆ど無意識の動きだ。

容姿に恵まれた冬桜に視線をやるのは自然だろう。しかし、この場合誠治にも多くの視線が集まっていた。

理由は簡単。周囲に人間は全員が十代前半から後半に見えるというのに、誠治の容姿はどうみても二十代前半、もう少し余裕を見れば後半に見えるのだ。

百八十を優に越す身長、すらりとした体躯に襟足が長めの髪は全てオールバックにされている。

後ろに立つ少女と同じく見事な黒髪に、その切れ長で細めの瞳は色素が薄いのか灰色だ。

顔の輪郭も全体的にシャープであり、眉は太くも細くもなく整っている。

鋭角的で知的的でありながら、どこか鋭さと苛烈さを同居させたかのように整った容姿であった。

全身から醸し出す雰囲気、空気が、余裕とも取れる態度が。

彼を“大人”だと周囲にどうしようもなく知らしめていた。

事実、年齢は今年で二十六になるのだ。

十代の能力発現が基本であることからしても、殆ど類を見ないタイプの能力者であった――

――クラスでの挨拶。

つまりは恒例とも呼ぶべき自己紹介を終え、今日一日は解散となった。

自己紹介時には自身が能力者かどうか、能力名、希少値判定の有無も明確化しなければならない。

能力名は各自で命名が許される。中には“超絶ブレイド”だとか、“邪王炎殺・龍波”やらとても痛い名を付ける者も居るようだ。

誠治の能力名は“炎の転換”。捻りのない名前だが実に正鵠を射

た名前だろう。

能力者が魔素を吸引し、それを錬度の有無で炎に転換し操作する能力。

希少値判定ではCと低いが、その汎用性は高く、殺傷力は侮れない。

一方、冬桜の能力名は“エネルギー操作”だ。

これまた正鵠を射た無骨な名だが、その希少値判定は誠治とは比べ物にならず、実にA判定。

ようはテレキネシスの強化版なのだが、能力の多様性のせいか、この能力者の数は非常に少ない。

この能力は“自身の生体エネルギー”と“魔素”を混合し、それを対象に当てることで“他の物質に干渉”することができる。

これが理由で生体エネルギーの枯渇が著しく、常に病弱虚弱の体質なのだが……

危険度や殺傷力という点でもそれは恐怖を冠するに相応しいだろう。

この能力に限らず炎の転換も“想像力^{イメージ}”というのが重要だが、このエネルギー操作に関してはそれを優に上回る。

精密な演算に潤沢な想像力。この二点がその精度と威力に大きく関わる能力。

凡人が持とうが宝の持ち腐れ、“最初から超人用”の能力とも言うべき力なのだ。

物質の干渉にエネルギーの操作、“世界の構成要素”に干渉出来るのにそれは等しい。

希少値こそ最高ではないが、この能力は扱うことが出来ればおよそあらゆる能力を捻じ伏せる暴威となるだろうことは、想像に難く

なかった。

「兄様？」

学園の外。淡路島のある住宅街に向かって歩いていく途中、冬桜の気遣うような言葉が誠治の背中から届いた。

学園で配布された携帯型情報端末機“^{イー}ITA”を弄りながら、思考の海に埋没しているのを心配したらしい。

「いや、ちょっと私達的能力について考えていただけだ。それより、ほらここが私達が今日から住む家になる」

そう言って誠治が指差したのはセキュリティ性の高い高層マンション。

所謂億ションと呼ばれる高級マンションであり、その五十階建ての最上階、五千五号室が今日から二人が住む家であった。

冬桜が啞然とした表情でマンションを見上げている。

無理もない、今まで住んでいた場所もそれなりではあったが、明らかに桁が一個ずれているようなマンションなのだ。

この島自体が特殊管轄下であり、一般人が居ないため格安での提供だが、本来なら名前の通り億で購入するべきものである。

「ほら、冬桜、ぼおっとしていないで着いて来なさい」

「あつ、はい。申し訳御座いませぬ兄様、びっくりしてしまつて…

…」

そう言つて頬を赤らめながらもマンションに入る誠治の後を追う冬桜。

オートロック式のドアの前、そこで指定された八桁の番号を入力し防弾ガラスのドアを解除、奥のエレベーターに乗り一気に五十階まで昇る。

チンと言う音と共に扉が開き、二人がエレベーターから降りた。廊下を見渡すも、部屋数は少なく誠治の見たところ五部屋しかない。

その五番目の部屋、その扉の前で磁気性のカードキーを専用スロットに差し込んでやると、ピピツと言う音と共にガチャリと鳴り、ロックが解除される。

「す、凄いです……」

冬桜が玄関からリビングに入った途端漏らした言葉だ。

「二人で住むにはいささか広すぎるかもしれないが。冬桜も年頃だからな、部屋数や広さがあって困ることはないだろう。玄関から真っ直ぐのここが見たとおりリビング兼キッチンだ」

冬桜が誠治の示した方向を見れば、なるほど。

確かにリビングとキッチンが一体となっている。

キッチンだけでも五畳程度はあるだろうか？ 更にリビングの広さは三十畳を越えているように見える。

玄関から見て真っ直ぐの奥は一面窓となっており、機能していないこの淡路島ではなく、都市ならば夜景も綺麗であったことだろう。

「家具などは実は別室に運んでもらっている。部屋を見た後、自分の部屋を決めて今日はその荷物整理だ。前回住んでいたマンションの家具だが、買い替えようと思ったものは廃棄してしまった。さて、他の部屋も案内しよう、冬桜着いて来なさい」

そう言ってリビングから玄関に通じる廊下に出る。

「玄関に向かって右側と左側に一部屋ずつで、間取りは同じタイプとなっているようだ。案内しなかったが、リビングにも書斎用の部屋に通じる扉がある。荷物はそこに置いて貰っているから、後で私が運ぼう」

軽く両部屋に入り冬桜に内部を見せてやる。

寝室用なのだろうが、それでも二十畳程はありそうな広さに冬桜が唖然とした顔を見せる。

それに誠治が苦笑を見せれば慌てて表情を取り繕う。

血は繋がっていないが、兄として慕い、あるいはそれ以上の感情を持った人にはしたくない姿は見せたくない、そう言う冬桜なりの乙女心であった。

「玄関から一番近い扉がトイレ、反対側が脱衣場で風呂への扉がある」

そう言って軽く脱衣場の扉を開け、中を見せる。

洗面台が二つ連結されており、壁には横に広い鏡が一つ嵌め込まれていた。

カチリと誠治が電気を付ければ、鏡の両端の電気が淡いオレンジ色の光を放つ。

「んっ？ こっちではなかったか……」

そう言ってもう一方のボタンを押せば、天井の白色の光を放つ蛍光灯に光が灯る。

脱衣場だけでも十畳近いだろうか？ まるでホテルのスイートのようだと、行った事もないのに冬桜は想像してしまう。

「そして、ここが風呂場だ」

そう言って磨りガラス式の扉を押し開けば、優に五名は一斉に洗えるだろう洗い場に、同じく複数名は浸かれるだろう広い風呂が視界に広がった。

湯沸かし器も最新の物であり、更にはジャグジー機能や曇り防止ガラスの奥にはテレビまで置けるようになっていた。

それを見て。冬桜が最近めつきり兄と一緒に風呂に入ってくれなくなっただが、これだけ広いなら一緒に入れそうだと、風呂の狭さが原因で一緒に入らない訳ではないのに、一人明後日の方向の妄想を展開していた――

その後、身体の弱い冬桜の分まで荷物を決めた寝室に運び込み、ベッド買い換えようと言うことで、その日は同じ布団で二人は夜を

過ごした

アンデルセン執筆 第一話（後書き）

後書き

いわゆる序章。

大きな舞台で、複数の主人公が同時系列で独自の物語を刻んでいく様をどうぞご覧下さい！

トップバッターはアンデルセンが務めさせていただきました^^

複数人作だから遠慮せず、バシバシ感想送ってください。

小さな一言が私達カルテットの糧となることでしょう。

休憩所執筆 第一話

魔素や魔物の出現は、人類にとって恐らくは大きな分岐点だったの
だろう。

魔物の存在は人々に恐怖を植え付け、傷痕を刻み、魔素の存在はそ
んな人々に唯一残された、一筋の希望になった。

そんな人々の>希望<や>願いくが寄り集まり具現化したのが、こ
の「ワールドアカデミー」という学園そのものだ。

生徒の過半数は能力者で占められており、残るほんの少しの生徒、
それが俺のような「一般人」枠の生徒である。

「あー、空が青いなあ。」

寮のベランダに出てグッと体を伸ばしてみる。
手を空に掲げ、

「……。」

そのまま、かざす事なく手は元の位置へ収まった。

「ん。気持ちいいなあ……。」

風を思い切り肺へと流し、肺の中の空気を外へ。

「よしっ」

自分の部屋へ向き直り、ベランダの鍵を閉め用意しておいた鞆を手に玄関を出た。

そう、今日は入学式なのだ。

一か月前から入寮していた俺にとって、もはや通学路は通いなれたもの。

校門の前で一度立ち止まり、深呼吸する。

——大丈夫、

そう言い聞かせるように心の中で呟き、校門の内側へと足をのばした。

先程から、ちらほらは確認出来た生徒も校門の中に入ればそれなりに多い。

入学式ということもあり、ちらほら見える生徒の行動は皆初々しい。

「鷹木！」

後ろから声をかけられ、振り向くとこちらに手を振りながらやってくる男の姿があった。

「先に行くなら行くって言えよッ！」

その場で立ち止まり男が到着するのを待っていると、思ったより息があがっている事に気が付いた。

「片識、お前まさか走って来たのか？」

息が絶え絶えになっているからか、片識は少し間をおいてから一息にまくしたてた。

「『まさか走って来たのか？』」

「じゃねーだろ！」

「てめえ、先に行くなら行くと連絡ぐらいよこせ、ばかやろう！」

「おかげで俺はここまで走って来たんだぞ！」

入学式からこれってありえねーだろうがっ」

相当怒っているのか、奴のいつもはねているくせ毛がぴくつと動く。

「あ、いや、落ち着け。悪かったって！

少しうっかりしてたんだ。」

奴のくせ毛がぴくりと反応するのは、>能力くが発動する兆し。

今よりもずつと酷く感情が乱れ、コントロール出来なくなるとくせ毛はなんと、ピーンと真っ直ぐに立つのだが俺はそれを一度しか見た事がない。

「チッ……晩ご飯、鷹木の奢り。」

それだけ言つと、片識はケツと悪態を付きさつさで行ってしまった。

——悪い奴じゃ、ねーんだけどな。

前方を歩く片識の行く手はそこだけ蜘蛛の子をちらしたようにさけられていた。

あの容貌では致し方ないと思うが。

少しだけ苦笑いし、前方の限りなく茶色に近い髪の友人の姿を見送った。

入学式は粛々と行われた。

まあ、ただ呆けているだけの輩もいたことも確かだが。

とにかく、入学式は無事に終わった。

クラスはA〜Fクラスまで能力別に分けられている。

因みに片識はEクラスだと話していた事をぼんやり思い出しながら、Fクラスの教室を通りすぎる。

俺の目的地は残念ながら、このA〜Fクラスのどれでもない。

地図を確認しつつ、目的地を確認する。

「……か。」

ひとつの教室の前に立ち、表札を確認する。

——特別枠

なるほど。

分かりやすいのは嫌いじゃない。

ガラガラとドアを開けると、そこには数人の男女が既にいて皆各々に気の合う仲間を作り出していた。

俺が入るとほぼ同時にチャイムがなった。

「早く入れよー。」

入り口辺りで止まっていた俺のすぐ後に、担任だと思われる男性が入ってきた。

身長はだいたい175くらいの好青年といった印象で、歳はすごく

若そうだ。

研修生だろうか？

「ん？ ああ、・・・鷹木 悠だよな。早く席着けー。席分かるか？」

「え、」

名前を言われて驚いていたのは、何も俺だけではなかったらしく周りは割とガヤガヤしていたのにシーンと静まりかえっている。その状況に担任らしき男は少しだけ苦笑いをこぼして話した。

「いや、実は昨日徹夜で全員の顔と名前暗記してきたんだ。

……初めての担任だし、気合い入れてみた。」

そう言っつて片手でドアを閉めてから、教卓の前まで歩み黒板にカツカツと何かを書いていく担任。

“海岡 高瀬”

そつデカデカと書いてから、こちらへと振り向きまだ席についていない俺たちに目を丸くしながらも呆れる素振りは一切見せず、担任は続けた。

「とりあえず座れ。あと、鷹木。」

「あ、はい。」

突然名前を呼ばれ内心びくびくしながら教卓へと進む。

「お前の席は、窓際一番後ろ、だ。」

トントンと卓上の紙を叩き、教えてくれる。

コトンと俺が座ったのを見計らい、担任は口を開いた。

「えー……まずは、入学おめでとう！」

俺は今日から君たちの担任の海^{かい}岡^{おか}高^{たか}瀬^せ歳は今年で25になる。
能力レベルはF。

特技はりんごの丸つぶしで趣味はゲーム。

彼女もいるけど、本州に残してきた。

何か質問あるやついるか？」

いつそ爽やかすぎるほどの笑顔でそう言い切り、こちらの反応を待っているのかニコニコ笑っている。

「は、はい。」

皆静まりかえっていた部屋に高めの声が響いた。

自分の席から割と近くから聞こえた気がする。

少しキョロキョロしてみると、その声の主はすぐ見付かった。

自分の斜め後ろで、控えめに手をあげている少女の姿を確認出来た。

クラスの目が一気にその子に集まる。

「ん。榊原 恵わかさげはなだな。よろしく！

で、質問は？」

担任は本当に全員の名前と顔を覚えているらしい。

榊原恵と呼ばれた少女はクラス全員の視線を一身に受けながらも、ひとつひとつ慎重に言葉を選びながら話した。

「あの、せ、先生はレベルFと仰られましたよね。具体的にはどんな感じの能力なんですか？」

最後の方は消えぎみの声だったが、少女は確かに言い切った。

担任は、暫く手を顎へとあて考えてから「よく見てろよ?」

とこちらに悪戯を思い付いた子供のように少し口角を上げてから、前に指を差し出した。

少しだけ眉間に皺を寄らしたその次の瞬間、指の上に小さな炎が上がった。

それは確かに小さく微弱な炎であったが、普通の人間には絶対に不可能なそれにクラスは一瞬ざわつく。

「これが、俺の能力。所謂“発火”だ。だけど、」

指を左右に少し振り、担任は炎に風を送る。

だが、最初のライター程の炎のサイズから大きくなることはなかった。

「見て分かると思うけど、この火はこれ以上成長しないんだ。だから、」

もう一度強く振り、炎を消す。

「レベルF。それも、だいぶ下のレベルだ。ギリギリセーフのレベルFって感じかな。」

担任は、それだけ言っていると少女へ向き直り、「これで大丈夫か？」と優しく問い掛ける。

後ろから、「はい。」と控えめに返事が聞こえた。

「他は？」

クラスを見渡す担任に見習いザツと見渡してみても、手をあげそうな生徒はいなさそう。

そう判断したのか、担任も「ないなら次行くなー。」と緩くHRが開始された。

HRはザツと一時間程度で終わった。

魔素や魔物の基礎知識や学園生活についてなど、いろいろな話を話

された。

そして最後に渡されたのがこの、携帯端末。

手のひらに収まってしまふこの端末の中に、先程説明された機能が全て入っているのかと思うと不思議な気分だ。

寮へと続く道を歩きながら、携帯端末を眺めていると、フツと友人の姿が浮かび足を止めた。

「あ。」

すっかり忘れていたが、晩御飯の買い物をしなくてはいけなかったのだ。

もう冷蔵庫には一人分しか食料がない。

男二人で食べるには、調達が必要な事をすっかり忘れていた。

足を寮へと続く道から店へと続く道へ方向を変え、歩きだした。

休憩所執筆 第一話（後書き）

初めまして！

読んで頂きありがとうございます！

二番手は休憩所が担当させて頂きました。

精一杯頑張りますので感想お待ちしております！

葦沢亀執筆 第一話

「言葉」

それは、誰かの魂の語り部。

それは、誰かの差し伸べた手。

それは、刃をも凌駕する兇器。

それは、無限の可能性へと導く神秘の扉。

俺の右手は歩みを緩めず、脇目もふらず、白い紙の上に黒く細い、それでいて強さを秘めた線を残していく。揺れてはね、円弧を描き、線は線と交錯し、点は線に寄り添う。やがて、その線と点の集塊は、形を成したその瞬間から意味を創出し、意味の連鎖は唯一つの事象を特定する。

俺はこの精巧精緻な、撥条時計に似たシステムが気に入っている。もちろん、この簡単かつ複雑なシステムを完全に使いこなせるはずもなく、掌の上に把握しているわけでもない。

しかし、だからこそ“言葉”は素晴らしい。
wonderful

そんなことを取りとめも無く考えている俺は今、人生という文脈において一つの転換となるであろう一日を過ごしている。つまり、負の遺産を処理することを半永久的に運命づけられた少年少女の監

獄、社会の芥箱ゴミハコへの、嬉しい嬉しい入学式を迎えてしまったのである。

校長と来賓らいひんがとりあえずの体面を保つ、普通の学校と何ら変わらない入学式を終えた俺は、校舎の屋上のベンチに座り、まだ真新しい無機質な建築物群を眺めながら、徒然なるままに浮かんでくる言葉を書き留めていた。

え？ 何でHRに行かないで、そんなことをしているかって？
そりゃ決まってる。平和、平穩、平凡、平坦な人生を送ってきたはずの俺が、突然の能力者宣告を受けてこんな奇々怪々な学校に入学させられ、挙句クラス分けの掲示に名前が無いなんて、神様からのイジメ以外の何物でもない。俺は別に悪いことは……まあ、幾つかしたけれど……信号無視とかだから、流石にこの仕打ちは無いだろ！
きつと今頃、ごく普通に段取りを踏んでいたら、自己紹介でもしているに違いない。今すぐにも事務室に行けば「どここのクラスですよ」と対応してくれるのだろうけれど、何か負けたみたいで気分が悪いから行かなかった。

俺は再び浮かんだ言葉を、まだページがヨレていない手帳に走り書きする。入学を記念して「スケジュールだけはキチンと取りなさい」と祖父から貰ったものだ。厳格な祖父らしい贈り物だったが、珍しくデザインは今風で、コバルトブルーの表紙は素直に気に入っている。きつと姉か誰かが協力したに違いない。こんな所に閉じ込められたらもう二度と会えないと、口には出さずとも悟っていたのだろう。

芥箱に捨てられた紙屑かみくずに、居場所が無いなんて理不尽じゃないか。

収集車が持つて行ってくれないゴミ袋の気持ちを、誰か分かっているのかい？

だって本人が悪いわけじゃないんだぜ。

他に居たい場所があるのにさ。

ただの八つ当たりだな、と自分を笑っていると後ろから声がした。

「君はさつきから、何をしてるのかな？」

思わず振り返ると、いや振り返ろうとすると、まさに顔の真左に、至近距離に、所謂いわゆるキスする3秒前くらいの、そんな位置に俺を覗き込む女子の顔があった。

瞬時瞬間、呼吸が止まる。

綺麗な瞳。

端正な顔立ち。

白い肌。

春の香り。

自信を持つて宣言させて頂こう。眼の前にいる生物は美少女だ、間違いない。

それはさておき。何なんだ、この状況……！？　こういうの、慣

れてないぜ？ まあ、慣れてても困るが。

無言でただ見つめ合う状況がどのくらいの間続いたか、ふと彼女の方から視線を外した。助かった、けどちょっと残念。

……おや？ その彼女の瞳は何かへ向かっている。

「ふふん。どうやら、その手帳に秘密がありそうだね」

俺は咄嗟に、右手に持っていた手帳を畳んで後ろに隠す。だが、もう遅い。

「コラ！ 見せなさい、流峰仁君！」

「え……あ、ちよつと！？」

ベンチに膝立ちすると、ちょうど俺に抱きつくような格好になって、まるで無邪気な猫のように手帳へと手を伸ばしてくる。女子の匂いが、ふわっと顔にかかる。左肩を掴む柔らかい手の感触が、服越しに伝わって来る。全身に走るムズムズした感覚。

これは夢か！？ 夢なのか！？ こんな夢を見る程、俺は頭が腐っちまったっていうのか！？ ……でも、覚めないと良いなあ。

そう言えば、何かオカシイような……！？

「ってか、何で俺の名前知ってるんですか！？ 初対面……ですよ
ね？」

アブナイ、アブナイ。

危うく大事な何かを失う所だった。

「ん？ ああ、そうそう」

彼女は何かを思い出すと、ベンチにちゃんと座って、ニッコリ微笑みながら言った。

「君ね、私の席の隣だから」

……？？

「ハア」

思わず、炭酸が抜けたコーラみたいな声が出てしまった。

「それでね、私は君のクラスのクラス会長になったのさ！」

ちょ、ちょっと待ってくれ。話を整理しよう。俺は、初対面ですよね？と聞いた。それに対して、彼女は俺のクラスの会長で、しかも隣の席だと言った。

断言しよう。一切分らん。支離滅裂だ。まだピカソの絵を理解する方が早い気がする。が、状況を考えれば、察しがつかないわけではない。

「えーっと、それはつまり、行方不明の男子生徒がいるから、クラス会長になったあなたが探すように頼まれた、とかそんな感じですか？」

「そうだよー！ 最初からそう言ってるじゃないか、君」

いや、言っていないですよ。

「じゃあ、行つくよー！」

即時即刻、彼女は俺の腕を引っ張った。どうやら教室へ連れていくつもりらしいが、予想外どころか的外れな不意打ちを受けた俺は、瞬時にこれから起こる不幸を感じ取った。生まれ持った身体能力、そして人間の関節の可動範囲を冷静に考えると、俺はこのままベンチから落ちるしか選択肢は無い。

「ちよつ、待って、君っ」

間一髪。俺の重心がベンチから空中へ移る直前、彼女の動きがピクリと止まった。ただ、この体勢はこれでキツイ。

「ちよつとお」

あれ？ 何だか、怒っているような？ なんか口調が変わった気がするんですが、私が何か粗相^{ソソウ}を致しましたでしょうか？

「君って呼ばないでくれるかなあ？」

ってそこかい！ さっきから君君^{キミキミ}呼んでるのはそっちだろうが！

「カルミアって呼んで」

……?? 二度目か。いや、外人じゃないんだから……って、確かに言われてみればハーフっぽい感じも……。

「カ、カルミア？」

「うん。私、夕泉カルミアっていうんだよ。珍しいでしょ」

珍しいと自覚してるなら最初からそう説明してくれ、頼むから。

「ああ、うん。確かに珍しい、かな」

「でしょ？　じゃ、行こっか」

ちよ、脈絡無視すなっ！　の前に、お、落ちるっ……。

まさに不幸中の幸い。骨だけは折らずに済み―男子の矜持は潰滅
敗走したが―、晴れて俺は机と椅子を確保するに至った。ただまあ、
不幸を免れることは不可能らしい。そこに用意されていたのはV I
P待遇、つまり教卓のド真ん前の特等席だった。しかもネジの外れ
た美少女の隣というオマケ付き。誰か買わないか？　今なら安くす
るぜ？

葦沢亀執筆 第一話（後書き）

最後までお読み頂きありがとうございます。

初めまして。

三番手を務めさせて頂きました、葦沢亀です。

皆さんからの率直なご意見、お待ちしております。

「チームカルテット」の紡ぐ4つの物語を、どうぞお楽しみに！

（ちなみに「葦沢」は「あしざわ」と読みます）

戸山羅花 1話

桜が咲き誇り、緊張と期待が溢れるこの季節。ここ、『ワールドアカデミー』は新しく入学する学生達を迎える入学式が執り行われていた。

周りを見渡せば、緊張した面持ちで学園長の話を聞く者、そんな話に興味はないと言いたげに欠伸をしている者もいる。

そんな中、俺だけは、いや、俺を含めた一部の生徒は浮かない顔をしていた。

「はあ……」

このワールドアカデミーは、普通に自ら進んで入学する人間と、アカデミーという組織によって強制的に『連れてこられる』場合がある。

そして連れてこられた場合の俺では、どうも周りのような雰囲気に合わせてられそうもない。

「なんで……なんで俺は能力者なんだ……」

「影原くん！」
かけはら

「っ！？ 榎原！」
かしはら

入学式終了後、Fクラスに割り振られた俺は教室前で渡された携帯端末（結構重要な品らしい……）を眺めながらボーっとしていると、聞き覚えのある声がした。

「影原くんも入学してたなの！ 良かったあー！ 一人じゃ寂しいなの！」

黄金に輝く髪を揺らしながら言う榎原。

「あ、ああ……」

この目の前ではしゃぎまくっている美少女は榎原かしはら 輝ひかり。普通はひかる、なのだがこいつの場合はひかりと読む。中学時代のクラスメ

イトで幼なじみという、よくあるライトノベル的關係なのだが、まあ、だからどうってことでもなく。語尾がなのなの付いているが、気にしない方がいい。そういう属性なのだ。

「影原くんはどんな能力なの？ 私はヒーリングなの！ やっぱり性格が優しいからなの！ うん！」

「馬鹿かお前は。……俺は、闇……らしい」

入学式前に行われた検査では、そう告げられた。

取りあえず手先からそれを放出させてみる。黒い煙のようなものが指から出る。

「わあ……。『闇』なの！ Aランクなの！」

「そうだな……」

そついや他の奴らのことは全く考えてなかったぞ……。これのせいでここに來た訳だし。

「ねーねー知ってるなの？ ここのクエストって誰とでも行けるなの。それで倒した敵に応じてポイントが貰えるなの。そのポイントで日用品とか、食べ物とか、武器とかも買えるなの！」

「……良く知ってるな。お前」

「ふっふーん！ これでも勉強してきたなの！」

「お前はこんなとこに來て楽しいのか？」

「うん？ 楽しいよ？ まあ、望んだ学校では無いけれど、影原くんもいるから寂しくはないなの！」

普通なら金髪美少女に言われてキョドるものだが、まあ、こいつが言うにはそう深い意味があるわけじゃない。

> i 1 2 7 2 2 — 1 3 2 1 <

「お前はそう言う奴だったな……。ほら、席戻れ。HR始まるぞ」

「はあゝい、なの」

そう言つて俺の後ろに座る榊原。

「お前そこなのか？」

「うん。そうなの。だって名前の順でも近いなの」

影原、榊原。確かに近いな。納得だ。

チャイムが鳴り、先生が入ってくる。

「そらー、席につけー。HR始めるぞー」

入ってきたのは若い男の先生だった。

「どんな授業なんだろうね……。楽しみなの」

「そうだな」

本心は全くそう思っていないのだが、適当にあしらっておく。

HRでこの学園の存在意義の簡単な説明と、これからの日程を伝えられ、直ぐに授業は始まった。

「よし、取りあえずまずは自己紹介と使用能力の説明と、ランクを言ってくれ」

先生に言われて、端から順番に自己紹介していく。

左から順に紹介していくので、左から2列目、前から4番目ということは結構早く来る。

あつという間に自己紹介が続き、直ぐに俺の番になった。

「えーと、長野県から来ました影原^{かげはら} 三門^{みかど}です。使用能力は闇でAランクです。宜しく願います」

こんなもんでいいか。着席し、榎原に回す。

「同じく長野県から来ました榎原^{かしはら} 輝^{ひかり}といいますなの。使用能力はサポーターで、Dランクなの。宜しく願いますなの」

「そう沈むな。まだまだやり直せるって」

「だってみんな笑うんだもん、なの」

「まあ口癖は中々治らないな」

案の定榎原の自己紹介は皆にとって笑いの対象だった。それもそうだ。見た目は美少女なのに語尾になのなの言っているわけだから「安心しろ榎原。すぐに慣れるさ。多分」

「うう……。ありがとなの」 どうやら気分はすっかりブルーのようだ。意外と繊細(？)だからなあ……。

「さて、今日は君たちも良く知らない魔物について説明して今日は

下校だ。今は九州以外じゃ殆ど見かけないからな。良く聞いて、覚えておくように」

「魔物か……。そんなもの、本当にいるのかねえ……。」

能力に目覚めても尚、未だに信じられないような事だ。明日からは魔物と対峙しなくてはいけないなんて。

「影原くん」

後ろから小声で話しかけてきたのは勿論榎原だ。

「なんだ？」

「榎原くんは寮なの？ それともアパートなの？」

「ん……。普通に寮だったな」

「じゃあ私と同じなの！」

「まあ男子と女子じゃ棟は違っただろうがな」

「ああ……。そっか」

「まさか気付かなかったのか？」

榎原は黙って頷いた。

何なんだこいつは。寮を普通の家と間違っただけ認識してないか？

「でも、同じ敷地内なの」

「それもそうだな。同じ学校だし」

「おい影原！ 榎原！ 喋るならよそでやれ！」

「済みませんでした！」

「済みませんなの」

こんなに喋っていたのは榎原のせいなのだが、ここで言っても後々面倒なので大人しく静かにする。

「……さて、まず魔物だが、こいつにも属性というものが存在する。君たちのようにな。そうすると当然相性が発生する。火は水に弱い、みたいにな。さらにはこちらは魔物がどんな属性を使ってくるかわからないんだ。そこで、君たちが効率良く戦えるよう、俺たちは複数の属性、つまりはグループで戦う事をオススメする。無論、まだ

慣れない環境で戸惑うこともあるだろうが、ぜひ、勇気を出して色んな人と行動してみてくれ。魔物については明日からの授業で説明する。次にこの学園の事だが、この学園は……」

退屈な説明がだらだらと続き、終わったのは大体お昼頃だった。

「うー。疲れたなの」

榎原が大きく伸びをする。

「お前は何をやりたいんだよ。説明の間中俺の背中いじりやがって」

「あ、気付いてたなの？ あれはメッセージなの」

「メッセージ？」

「そうなの。『今日はいい天気なの。暇なの』って書いたなの」

「知るか！ つーか前後の文章が繋がっていない！」

天気と自分の気持ちにはかなり隔たりがあると思う。

「まあまあ、そんな事より早く寮に戻るなの！」

「分かったよ」

別棟だが、途中までは一緒なので榎原に着いていくことにする。

「んじゃ、ここでだな」

「うん、じゃあねーなの」

「はいはい」

校舎はどうやらコの字型らしく、コの縦線部分がそれぞれの教室上下の横線が能力別の実践教室（？）になっている。その上側から少し離れた所に男女の寮が一行に並んでいる。管理人に自分の部屋番号と、鍵を渡され、案内板で自分の部屋を探す。

「俺の部屋は……四階か。荷物も纏めなきゃだし、急ぐか」

部屋の中は思ったより広く、備え付けとして、テレビ（液晶）、低めのテーブル、冷蔵庫、おまけにキッチンまである。

「よし、んじゃ纏めちまうか」

ダンボールを取り出し、荷物を取り出していく。

「えーと……。服はクローゼットだろ、食器はキッチンで、洗面用

具は風呂場か。思ったより荷物預けてねえな」

もつと生活に関係のない、例えばゲーム機なんかでも持ってくれば良かったな……。暇じゃねえか。

今更そんな事を言っても仕方ないので、暇つぶしに図書館でも行くことにする。

「……図書館つて、どこだ？」

考えても浮かばないものは無駄だよな。早速だが、学園より支給された携帯端末を使わせてもらおう。

「……あ、もしもし？ 榎原？」

「……で、ここが図書館なの。分かった？」

「はいはい。どうもありがとござーます」

「ちゃんと言わなきゃジューズなの」

「分かったよ……」

礼を言つて図書館に入る。そこで同じクラスの奴がいた。名前は確か……大柳。おおやなぎ

まあ、だからどうってわけじゃないんだが。同じ闇を使う奴なので、なんとなく気になった。大柳の隣を通り過ぎようとすると、向こうから話しかけてきた。

「君、僕と同じ闇を使うんだっけ？ これから色々あるだろうし、授業中くらいは仲良くしてくれ」

「お前男だったのか！？」

「何だその反応は！？」

マジか……。完全に女だと思っていたぞ……。

「悪い。ちつとマジで女だと思ってた」

「そういう事は言わない方がいいとは思っけどね。……まあいい。

僕はおおやなぎ大柳しゅうた翔太。改めて宜しく」

「おう。俺は影原三門だ。宜しく頼む」

軽い握手を交わす。これなら授業中も一人にならなくて済みそうだ。

「君はもう誰かと組んだのかい？」

「ああ。榎原とな」

「榎原君とかい！？ 大胆な！」

「いや待て。あいつとは小学校からの幼なじみだ。別に今日知り合った訳じゃないぞ？」

「ああ……どうりで……」

まあ知らない奴から見ると確かに大胆かもしれない。初日からあんな奴と話せる奴はそういないだろう。

「そういえばあの子はサポーターだったけ？ 羨ましいよ。戦闘において重要な配置だからね」

「そ、そうなのか？」

「君はそんなことも知らないのかい？ そのくらい基礎知識だよ」

「あ、ああ……悪い」

なんか怒られた。何もしてないのに。

「ところで君はどうしてこんなところに？ まさか君も予習かい？」

「いや、なんも娯楽がないからな。さつき頼みはしたが、それまでここに来るのも悪くはないかなと思ってさ」

「そういうことか。まあ、立ち話もなんだし座りたまえ。僕自身の復習がてら、魔物について説明しよう」

「いや、それは大丈夫だ。悪いな」

「そうかい？ じゃあ、またの機会に」

軽く返事をしてその場を立ち去る。……なんかこいつしゃべり方が……ナルシストみたい。

一時間ほど適当に時間を潰していると、端末が震えた。

「っと。誰からだ……って榎原か……」

——図書館の前に来てほしいなの。直ぐになの——

「何だよ」

「あ、案外早かったなの。もう直ぐ夕食なの」

「そうだが……どうかしたか？」

「買い物を手伝って欲しいなの」

「は？ いや俺らはまだクエストをしてないだろ？」

買い物に必要なポイントはクエストをこなすと報酬という形でこの端末に貯まっていく。ポイント（報酬）は難易度によって変動する。つまりはゲームのように、難しいクエストをこなせばより購入の難しい上位装備やアイテムが手に入るというしくみだ。

そして、まだクエストをこなしていない俺らは買い物なんて出来ないんじゃない……。

「支給ポイントとして最初から端末に入っているなの。それを使えばいいなの」

「へえ……。まあ、支給がなかったら新入生は初日から餓死だもんな」

そういうことで、俺らは地下にあるデパート的な所へと向かった。

「うつわー。広いなー」

「生活から戦闘中のアイテムと、何でもあるからかなり広いなの」

「こりゃ、下手したらそこら辺のテーマパークより広いんじゃないかねえか？」

「そのくらいはあるかも、なの」

地下デパート（？）は地下一階から地下五階まであり、上から生活用品、食品、娯楽用品、戦闘中のアイテム、一般人用武具と別れていて、一階分にまとめたら学園より広くなりそうだ。

「さてじゃあ、買っちゃまうかなあ……」

「はいなの」

言うやいなや、俺の後ろを着いてくる榎原。

「おい待てこら。何故ついてくる？」

「ん？ 私は料理出来ないなの。だから影原くんにつってもらうなの」

「いや、お前少しは努力しろよ。てか、俺は女子寮に入れないぞ？」

「許可証はもう影原くんに送ってあるなの。だからオッケーなの」

「許可証？」

「……影原くんは何も知らないなの……」

困った奴だ、とばかりに肩をすくめる榎原。

「いいなの？ 基本的に異性の寮は入室禁止なの。だけど、相手、この場合は私が影原くんに許可証を送って、それを影原くんが管理人さんに見せれば異性の寮にも入れるなの。分かったなの？」

「ほー。よく分かった」

「よし、なの。では買い物宜しくなの」

「オッケーお前の料理に対するやる気の度合いが良く分かった。ワリカンな」

「……。分かってるなの」

材料も無事揃い、現在は榎原の部屋にいる。許可証を見せる時は怖かったが、意外とすんなり入ることが出来た。

「さーて、作るから邪魔するなよ」

「じゃあ私はテレビでも観てるなの」

そう言つて榎原はキッチンを離れた。

先ずはメインだ。確か……あいつは卵アレルギーだったな。いや
まで、他にも……あ、後ジャガイモだ。初日だし、豪勢に行つちま
うか。

「……さて、メインの下準備はオッケーだ。次は……」

そんな感じで順調に進み、三十分程で完成した。

「よっしゃ、榎原ー。出来たぞー」

「はいなのー」

二人分の皿を運んで、ご飯もよそつてテーブルに並べる。

「……おおー」

食卓に着いた榎原が声を上げる。

「生姜焼きなの。あと、これは……カルパッチョなの？」

「まあ、そんなもんだな。結構頑張ったぞ？ 初日だし」

「影原くん、最初は落ち込んだのに、復活したなの」

「そういえばそうだな……。まあ、知り合いもいたから大分心も軽くなったのかな」

「じゃあ、影原くんは私のおかげで元気でいられるなの」

「調子に乗るな」

あまり気にせず、悠々と生姜焼きを口に運ぶ榎原。

「んー……。美味しいなの。影原くんはお店開ける腕前なの」

「言い過ぎだ」

幼なじみとはいえ、女の子、しかもかなりの美少女に言われては、流石に照れてしまう。

「こっちのカルパッチョも美味しいなの」

「そりゃ何よりだ」

そんな時、また端末が震えだした。

「何だ？ えーつと……『先ずは入学おめでとう。影原君。さて、早速で悪いが、我々生徒会からのノルマというものを提示させてもらおう』って初日からだよ」

「私の所にも来てるなの」

「『生徒会のノルマとは、自由クエストの他に必ず挑戦しなくてはならないものだ。これを成功させるか否かで、上位クエストの開放が決まってくる。頑張ったまえ。今回のノルマはA-1地区に発生した魔物を三匹以上討伐すること。このクエストについては討伐数に比例してポイントを加算する。さらにパーティーを組む事も許可する。健闘を祈るよ。生徒会より』……か。榎原は？」

「私は誰かとパーティーを組んで行動すること。クエスト中でのヒーリングは死と隣り合わせの戦場において重要な役割を持っている、しっかり援護すること。なの」

「ふーん。なら――」

一緒にどうだ？ と言おうとしたところで遮られた。

「い……一緒に行くの！」

「分かった、分かったから！ 近いって！」
身を乗り出して言う榎原を落ち着ける。

「じゃあ、明後日！」

「分かったよ……早いな。つか」

「わああ……ってごほん！ 足手まといにならないで、なの」
「なるか！」

次の日から早速授業で、護身用と攻撃用、それから索敵用の能力を習い、あつという間に水曜日。

「えーと……榎原は……」

取り敢えず校舎前で集合となっていたが……。

「あ、影原くん！」

「おう。準備は出来てるのか？」

「うん。なの」

あれからさらに分かった事がある。どうやら俺と榎原を幼なじみではなく、彼氏と彼女という関係で誤解しているらしい事だ。榎原は気にしないどころか嬉しがっているようだが、俺としてはむずかしい事だ。

「クエストの受注は済ませてあるし……。問題ないな。じゃあ、行くか」

校舎へと入って行く。テレポーターは校舎内にあるらしい。

「えーと……あ、ここだ」

「ちょっと緊張するなの」

大分固い足取りで教室(?)へ入る。

室内は研究室のようで、真ん中にテレポーターらしき機械が置いてある。

「はい。テレポートしますね。どこでしょう？」

職員らしき人物に話しかけられる。

「あ、A-1地区です」

「お二人ですか？」

「はい」

「では真ん中のテレポーターに乗って下さい」

「はい」

あーもう、緊張するなあ……。なんせ初任務だし……。

「では軽く目を閉じて下さい。3、2、1で目を開けてください。」

そこはもう魔物の巣窟、四国です」

目を閉じる。先生の声が聞こえてくる。それと何かの機械音。3、2、1……。

「……あれ……」

目を開けると全く知らない風景が広がっていた。崩れかけた建物。ここが九州なのだろう。

「影原くん……？」

後ろから声がした。振り向くと榎原がいた。

「これは……凄いな」

「ここが四国なの。A-1地区はとても弱い魔物が出るなの。と言っても私達は初任務だから、油断は禁物なの」

「分かってる」

地面はアスファルトが剥がれ、砂が剥き出しになっている。その荒れ果てた道を二人で歩いていく。

「探すか……」

早速だが、能力の出番のようだ。

「黒き漆黒なる闇よ。この地に膜となりて光を見出さん」

足下から黒い煙のようなものが吹き上がり、辺りに散っていく。

闇の索敵術、『闇の膜』だ。

「うーん……こっちな」

感覚を頼りに進んでいく。思ったより簡単に見つかった。術式を閉じ、相手の様子を見る。

「……ちつこいなあ」

相手は小さな毛むくじゃらの魔物だった。鳥のような足に小さな赤い目が光っている。

「なんか弱そうなの」

「ホントだな」

取り敢えず倒さなくてはならないので、能力を発動させる。

「黒き漆黒なる闇よ。鋭き槍となりて光を突き通せ。」

手元から黒い煙が湧き出て、徐々に槍の形を持って行く。

> i 1 2 7 2 3 — 1 3 2 1 <

「よし、初戦の相手はあいつだな」

魔物に突き刺すように突っ込む。しかし、素早くよけられる。

「っ！ こいつすばしっこいな！」

槍を振り回すが、まあ、いとも簡単によけられる訳で。

「うぜえ！ イラつくなーオイ！」

弱ければ簡単、ということでもないらしい。というかそもそも、まだ俺は全然実戦経験がなく、覚えた能力だって「索敵術」「闇の手」「闇の槍」「闇の盾」程度だし。しかもそれすら使いこなせていない。

「当たれ！ 当たれ！ おりゃ！」

もはや能力者というより、新米のハンターみたいな気分だ。槍を投げられないところとか。

「あ」

その内偶然当たった。なんだろう。全然達成感ないや。

「よーし。んじゃ次を探しにいくか」

「私は見てなかったけど……勝ったなの？」

「なんでヒーリングが余所見してんだよ。……ああ。無事にな」

さつさと歩き出す。……おお、某有名製薬会社のマスコットキャラクターだ。こんなのもそのまま残ってるのか。

「いねえなー。索敵術は結構疲れるから……ん？」

「……人影、なの？」

どうやらあちらも気付いたらしく、こちらへ向かってきた。

「やあ！　こんな所で会うとは奇遇だね！」

「大柳！　……っってお前……一人か？」

出てきたのは大柳。ただし一人だ。

「うん。まあ、入学して日も浅いしね。なかなかパーティーは組めないさ」

「誰？」

一人状況を理解していない檜原は首をかしげている。

「ああ、知らなかったっけか。こいつは大柳。俺と同じ闇だ」

「宜しく」

「宜しくなの」

二人が挨拶をする。

「俺らとはパーティー組めないのか？」

「残念だけど、クエスト中は組み替えたり、新たに加える事は出来ないんだよね」

「そうか。じゃあ、お前も頑張れよ」

「ああ。せいぜい死なないように頑張るさ」

大柳と別れ、索敵を再開する。

「じゃあ、残り二匹も倒しちまおう」

「りょーかい、なの」

すると少し歩いただけで、今回は簡単に見つかった。

「二匹いっぺんにか。まあいいや。どうせそんなに強くねえし」

「頑張つて、なの」

「……黒き漆黒なる闇よ。鋭き槍となりて光を突き通せ」

先ほどのように黒い槍を作り出す。相手の一体はさっきの毛むくじやらの魔物だが、もう片方は犬のようで足下から黒い煙が絶えず噴き出ている。

「闇属性か……。面倒だな」

確か同じ属性同士ではダメージが軽減される、らしい。

「じゃあ最初に雑魚から！」

大きく飛び上がり、毛むくじやらの魔物に突っ込む。素早いが、徐々に角へ追い込めば良いだけの話だ。

「影原くん！ 後ろなの！」

「うわつと!？」

よけた瞬間、黒い煙の塊が通り過ぎる。

「あーもう！ 相手してやつから待つとけつて！」 犬の魔物を追いつくように槍を振り回す。

「くそつ！ 毛むくじやらはこれで十分だ！ 黒き漆黒なる闇よ！ 輝く光を掴み、永なる闇で包み込め！」

黒い煙が手のように地面から伸びてきて、毛むくじやらの魔物を掴む。この手は俺が操作可能で、訓練すれば多くの手を操れるようになる。

「消えろ！」

思い切り叩きつける。毛むくじやらの魔物は動かなくなり、黒い煙となって霧散した。

「さあて、残るは……つてうわつ！」

虚空から俺が出したような手が引っかいてきた。

「闇の盾！」

手を前に突き出し、黒い煙を盾のように空中に浮かべる。

「おら！」

盾を解除し、槍で突く。当たったのだが余り効いていないような気がする。

「私も手伝うなの！ 愚鈍なる魔物よ、無なる矢にて、罪を知れ！」

檜原がそう言うと、犬の魔物に突然矢が刺さった。

「おお！ サポーターって後方支援も出来るのか！」

「いや、基本的に支援系が主なの！」

「止めは、俺があ！」

槍を思い切り振り下ろす。犬の魔物は胴体を引き裂かれ、黒い煙となって霧散した。

「終わりか……」

「どうやって帰るなの？」

「ああ、出口用のテレポーターがあるからな。そこで連絡して、遠隔操作で帰らせてもらうんだよ」

「分かったなの」

端末で連絡し、テレポーターで学園へと戻る。

「んー……。結構ゲームみたいで面白かったなの」

「生死を分ける戦いをゲームにされてたまるか」

こうして、俺と榎原は最初のノルマをクリアした。

戸山羅花 1話（後書き）

戸山羅花です。なるべく最後まで書きたい……。本家の方もよろしくです。

休憩所執筆 第二話

エレベーターで上ると、そこには予想を遥かに超えている食料品の数々が並んでいた。

このワールドアカデミーでは、生活用品や武器等全てこのビルで揃えられるようになっていた。

今までは、入寮前に買っておいた食料で賄っていたのでまず広さに驚いた。

隅に置いてある籠とカートを手には、俺はまず野菜コーナーへと足を進めた。

「しかし、すごい数だなあ……」

ザツと見渡す限り、見たことない野菜も多い。
機会があれば挑戦するのも悪くないかもな。

「……鍋とかでいいかな。」

野菜を見ていたら急に食べなくなってしまった。
男二人の食欲を満たす為の食費はバカにならない。ならば、食欲を満たし且つ食費を抑えるには一番適しているように料理に思えた。

そうと決まればあとは楽だ。

鍋に必要な野菜を籠へどんどん入れていく。

肉は多めに仕入れ、キノコも欠かせない。

「あとは、
」

糸こんにゃくと、豆腐と…米もなかったから買わないと。

頭の中でぐるぐると考えていると、前方に人だかりを確認出来た。

——なんだろうか。

普段なら別段気にも止めないのに、何故か気になりそちらへと足を進める。

近づくにつれ、どうやら人だかりの中心の人物と店員が揉めているらしい事が分かった。

チラチラと声も聞こえる。

「だから！ この値段はおかしいだろ、って言ってるんだよ！」

…。

随分…聞き慣れた声だった気がする。

面倒に巻き込まれる前にさっさと退散しよう。

足を元来た道へと転回させ、何事もなかった見なかったと自分に言い聞かせ一歩を踏み出したその時。

「あ。鷹木。」

丁度、人だかりの隙間から確認出来たのだろう。

片識は俺の名を呼んだ。

いや、正確には呟いたと表現した方が正しい気がしたが今はそんな事実どうでもよかった。

問題は、片識と店員とその他多数の視線が一気に俺に向けられた事。

無視すればいいのに、俺は反射的に振り向いてしまい直ぐ様後悔する事となってしまった。

とにかく、目、目、目…人の視線の強さをひしひしと感じ思わず後

退りそうになる。

店員らしき人物は懇願するように此方を見てくるし、集まった人達は好奇心を隠す気もないのかじいっと見つめ、ただ一人だけ違う視線を向けるのは問題になっている片識の間抜けな視線だけだった。

俺は一つため息を吐くと、人だかりの中央へと足を進めた。

片識は未だポケットとしているが、一刻も早くここから消えたい一心で店員に向き直る。

「あの、こいつ何かしでかしたんですか？」

先ほど聞こえた声からだいたい原因は察していたが確認は必要だろうと話し掛けると、店員は神にもすぎる勢いで話始めた。

「いえ、その…そちらのお客様がこちらの商品の値段が高すぎると申しております、」

まだ話している途中で漸く片識の意識が戻ったらしく、舌打ちが自分の横から盛大に聞こえた。

それに店員は「ひっ」と小さく悲鳴を上げて口をつぐんだ。

「だから何度も言ってるだろ。値段が高すぎるってよ!」

俺はだいたいの事情を把握し、店員が持っている製品に目をやる。

…糸こんにゃくか。

ちらりと自身の籠へ目をやり、まだ買ってたなかったよなと確認する。

「あの、それ俺が買います。」

糸こんにゃくに指をやり、店員の手から糸こんにゃくを取り、いいですね？と確認をする。

「は、はい。こ、こちらでよろしいですか？」

今にも泣き出しそうな店員を軽くスルーし、値段を一応尋ねる。

「さ、380円になります…。」

…高い。

片識の反応をちらちら確認しながら言う店員から若干目をずらし横

のこんにやくコーナーへ目をやる。

こんにやく、一番安いのでよかったんだけどな…

しかし事態を休息させるには、これが恐らく一番手っ取り早い。

「ありがとう。」

店員に背を向け、片識へ視線をやり、さっさと来いと合図を送る。
僅かな怒気が含まれているのは勘弁して欲しかった。

「5980円になります。」

あれから必要なものを籠へ入れなんとか予算内で買えたことに安堵する。

店の外に出ると俺達は真っ直ぐ寮へと向かった。
向かったのは俺の部屋。

ルームメートは夜ちよっと用事があると、朝言っていたしどうせ長々といないだろうと思つての事だった。

要するに、特に何も考えていなかったということだが。

とにかく、さつさとガスコンロを用意する。

「あれ…確かこの辺りに…」

がさがさと棚をひっくり返していると、後ろから切つていいかと尋ねられる。

「おう、頼む。」

スーパ-の袋から野菜を取出し、後ろでとんとんという切る音が聞こえた頃、

漸く奥からガスコンロを引っ張り出した俺はそれを引っ張り出し机へ置く。

「こんなもんか？」

「まあ、そんなもんだろ。」

丁度二人分程度の野菜の量に頷く。

あとは煮るだけ。

別段気にする事もなく、野菜きのこ類、豆腐を入れて待つ。

ダシは基本的に適当。

これぞ男の料理！

…なんてな。

「あ。そういえば、片識なんであそこにいたんだよ？」

今まで気付かなかったが、あそこにこいつがいること事態がおかしいのだ。

何より、絵的に合わない。

「え、ああ。」

鍋の中の白菜を箸で突いている片識はそのまま続けた。

「…ほら、奢れって言ったけど一つくらいは持って行った方がいいのかと思ってよ。」

なんともらしくない台詞に頭を傾げたが、追求する必要もないだろう。

「そ。なら、なんでこれ…安く欲しかったんだよ?」

鍋の中でいい感じに湯だっている糸こんにゃくを突き質問する。

「いや、単に食べたかったから?」

きょとんとされても可愛くなんかないが、成る程と合点がいく。

間もなく鍋も出来上がり、そのあとは他愛ない会話を交わし片識は片付けを済ませて去っていった。

俺も特にする事もないかと、布団に潜りそっぴいえば明日から授業かと頭の隅で考えながら意識は飛んでいった。

休憩所執筆 第二話（後書き）

<鍋食べるだけで終わってしまった…orz

始めましての方も通って頂けている方もこんにちは！

二番手担当の休憩所です！

今回内容無さすぎて本当に申し訳ないです；

鍋を食べてもらいたかったんです↑

休憩所

葦沢亀執筆 第二話

< 始業式翌日 >

「19番でお待ちの方、3番受付へどうぞ」

次はやつと俺の番か。「整理番号20番」と表示しているIT Aのディスプレイを確認して、俺は小さな溜息^{ためいき}をついた。

何から説明しようか。

いや待て。誰に説明するのだろうか？

まあ、いいや。

とりあえずの始まりは、昨夜届いたメールである。差出人は生徒会。

書いてある中身がよく分からなかったから、やや不安があったものの、カルミアに電話してみた。すると意外にも、アレでもクラス会長らしく、一応（理解できる程度の）まともな説明が返ってきた。

「生徒会と言ってもね、ここの生徒会は普通の生徒会じゃないんだって。もちろん、一存でも役員共でもないからねっ！ 毎週ノルマを生徒に与えて、達成度によってポイントをあげるのが、ここの生徒会の役割。つまりは、このアカデミーの歯車、ってところかな」

その時は話半分に聞いていたが、今朝来て分かった。まさにカルミアの言う通り「普通」じゃない。ここの生徒会室は、校舎の一角にある点は至って普通なのだが、規模が違う。教室二つ分くらいのスペースを占有して、事務室や相談者窓口などが並んでいる。一見、役所の窓口のようだ。

新入生用だろうか、その入口に簡単な生徒会の紹介文が掲示してあった。日本語と英語とが並んで貼ってあるが、カッコよさが断然違う。まあ、日本人は英語に弱いからそうなのかもしれないが。それでも「小学生向けかよ！」とツツコミたくなるような、人をナメている文章を、読むは一時の恥、と我慢して斜め読みする。なんでも「生徒全員のノルマ管理から魔物の把握、ポイント処理に至るまでを一律管理」しているのだそうだ。

本題に戻ろう。問題はメールの内容だった。面倒なのでざっと要約すると、今週の俺のノルマは「強すぎる魔物を倒しに行くこと」らしい。

もちろん俺にそんなポテンシャルは無い。入学早々未知の能力が開花してうっかり強力な敵を倒しちゃいました、なんて主人公チックなチート展開ならまだしも、現実にそんなことが起こるはずがない。

そんなワケで今朝はこうして、わざわざ授業前に生徒会室まで出て向いてきたのだ。

と言いつつ、実のところ俺は自分の能力を把握していない。まだ開花する可能性はある、ならばいいのだが、そういうことでもない。あの日、つまり自分が能力者であると知らされた日。白衣とメガネに囲まれて、さっぱり分からない精密検査のデータを見せられた俺がウトウトしたのを見計らっていたかのように、それは説明された。

模倣——単純明快、他人の能力を使えるようになるチカラ——だった。

当たり前だが、当時普通の中学生として生活していた俺に、自分が

能力者だと気付く可能性など無かった。一般人が能力者と出会うことなんて無いのだから、そもそも能力をコピーなんてできるはずが無い。

ところが、というより必然なのかもしれないが、どうやって使うのか、なんていう実用的な知識は研究者にとつてはどうでもいいらしい。あの時の説明は「コピー能力がどんな原理で可能になるのか」が、「魔素」だの「神経」だのといった用語をちりばめて、ただ朗々と読み上げられていただけだった。

「コピーの仕方は、自分で探して下さい。それも経験です」なんて言葉で締められた時は『それもそうだな』と頷いてしまったが、よくよく考えてみれば使い方を探し出せるはずが無い。「コピーッ！……」と叫べとでもいうのだろうか。俺はそこまで夢見人間ではない。

「20番でお待ちの方、2番受付へどうぞ」

おっと、俺の番か。

カウンターの番号を眼で追い、2番受付につま先を向けた。そこにはげっ歯類のような、明らかに俺よりも年下っぽい少女、ないし幼女が、落ち着き払った様子で座っている。よくもまあそんな小さい頭にピタリ合うヘッドフォンマイクが見つかったな、と危うく言いかけるところだった。

「御用件を」

顔の割に随分冷めて大人びた口調だな、という第二印象は表に出さないように、なるべく手短かに用件を伝えると、彼女はキーボードを眼にも止まらぬ速さで打ち出した。幾つもの3Dウィンドウが、

膨らんでは弾けるシャボン玉のように、開いては閉じを繰り返す。それを見つめる彼女の眼は、その儚さをただ眺めているようだ。そんなことは置いておいて、兎に角その容姿に似合わぬタイピングスキルに『スゲエなあ』と感心しながら観察していると、ふと彼女の胸元に―そこに眼がいったのは決して下心ではない―下がっているネームプレートが眼に入った。

「民原ノノ Nono Tamihara Age・18」

外国人も多いから英語表記もなされているのだろう…… って3歳も年上!?

いや、そんなことは無いぞ、流峰仁。きっとこれは何かの間違いだ。ホントは「3」って書いてあったのが、たまたま光の加減で「8」に見えただけだ。眼を閉じ、心を落ち着かせた。息を吸って、ゆっくり吐く。眼を開けて、そこに見えるのは「3」なのだ何度も言い聞かせて、静かに眼を開いた。

その瞬間、俺の眼が捉えたのは、彼女のネームプレート……じゃない!?! 民原さんの目から冷たく伸びる直線が、俺の眼球を正確に射抜いている。うっかり吸い込まれそうになる、冬の澄んだ空のような丸い瞳。え?と固まること3秒間。

「聞こえていないようなのでもう一度言いますが、後程訂正のメールをお送りしますので、もう帰ってよろしいですよ」

何だ、そういうことか。

不意に膨らみかけた淡い期待は、既に跡形も無く消え去っていた。しかし、感情がこもっていない機械のような接客口調で、続けざまにこんな言葉が出てくるとは思いもよらなかった。

「それとも、私に見蕩みとれましたか？」

狡猾すうがしこい悪魔のような、ニヤリという効果音が聞こえてきそうな微笑み。

「と、とんでもない！」

今の俺の人生経験では表現できないような恐怖感が、俺の神経を舐める。ロリコン疑惑をかけられないうちに、俺は逃げるように席を立った。

その時だ。

「あの……」

後ろから知らない女子の、例えるなら紫陽花あじさいのような声がした。

「すみませんが、受付には整理番号の順番でお待ち下さい」

民原さん（18歳）が即座に対応する。

後ろを振り向くと、そこにいたのは一見普通の女子高生だった。ツリ目気味で気の強そうな印象を受けるが、その拳動を見れば大人しい性格だということは、すぐに見た者の脳にインプットされる。揺れるポニーテールが第二印象だ。これは男子にポイントが高い。

「いや。私にも同じような間違いメールが送られて来ているのだが」

聞いて初めて分かる、この堅苦しい言葉遣い。芯のある立ち居振る舞いに、凜りんとした存在。俺の人間観察の癖は、迷うことなく厳格な

家柄だと結論付けた。きちんと整えられた身なりと、静かに放つ透明なオーラは誰も寄せ付けないものがある。

そんな彼女のＩＴＡをチェックして、民原さんは何かに気付いたようだ。顔色こそ変えないが、目の動きに感情が透けて見えるような気がした。

「どうやらお二人のメールを取り違えてしまったようです。それでは羽守様はねかみの分も後程訂正するメールを手配しておきます」

「かたじけない」

一体いつの時代から？とツツコむべきかもしれなかったが、あいにく視界に入った掛け時計の長針は、授業開始チャイムへのラストスパートをかけたところだった。

「ヤベッ！ 遅刻するっ！」

その日は授業が午前だけ。午後はカルミアと一緒に、生徒会から改めて指示されたノルマを達成しに行くことにしていた。というか、されていた。

「ワープッ！ ワープッ！ 楽しみだね、君っ！」

どうやら隣の純粹天然会長は、初レポートが待ち遠しくて仕方ないらしい。俺より3歩ほど前方で、スキップを取り入れた斬新な歩行をしている。

さらに残念なことに、レポートをワープと勘違いしてしまって

いた。両者に違いは無いかもしれないが、やはり訂正しておくのが無難だ。カルミアだって、ちょっとオカシな感覚をしているが、昨日電話の向こうにいた女子も、やはり彼女なのだ。間違いだって、さりげなく気付かせればいいはずだ。

「そ、そうだね。ところで、テレポートなんだけどさ」

「テレポートじゃない！ ワープだよ！」

そこでカルミアは突如反転。^{クイックターン}俺の進行を邪魔すると、怯む俺の顔を下から睨^{にら}んで来た。

「間違えるなんて、ここの生徒にとってあるまじき行為じゃないかな？ 隣を歩いていて私の身にもなってくれないと、困るんだよっ！」

そう言うのと、もう一度反転。^{リバース}ちょっと怒りが混じってさらに奇妙になったステップを踏みながら、カルミアはさっさと歩いていつてしまった。

いや、間違ってるのはあなたですよ……って、言っても無駄か。

そんなこんなでテレポーターの設置教室へ行ってみて、思わず面喰らった。よく考えてみれば分かることだったのだが、教室前の廊下は、俺たちと同じように授業が無いサルと、持て余した時間で覺えたかのような言語能力による無駄な会話で、占有率200%オーバーの状態だった。

「ワァーっ。人がゴミのようだね」

「その言葉、そんなにニツコリ笑って言うもんじゃないでしょ、力

ルミアさん？」

全く、それこそ隣に立っている俺の身にもなってくれ。ところが、ここでまたしてもカルミア命令が入った。

「コラ、『さん』付け禁止って何度言ったら分かるのさ？ 今日でもう3回目でしょ？」

「ああ、ゴメンゴメン。カルミア、ね」

女子の名前なんて呼ぶのに慣れていないんだから、しょうがないだろ。

そこで俺は自分の置かれた立場の危険性にようやく気付いた。さすがに列に並んでいる状態では、カルミアの失言を公に流しっぱなしにしておいてはマズイ。「ワープ」という単語が発せられる度にチラチラとこちらを振り向かれるのが、決定的だ。

そのために俺ができる策は、ただ一つ。カルミアが口を開ける前に、こちらから一方的に喋り続ければいい。他に考えられる手段も無く、普段ならめったにこちらから話すことなんてない俺は、どうか話題をやりくりして30分近く耐えるという偉業あらわざを成し遂げた。ただまあ、それをココに載せるには忍びないので、割愛させて頂こう。

で、30分後。

そんなワケですっかり疲れ切った俺がやっと教室の中に入ると、教室のド真ん中にそれはあった。多少自信のある俺の想像力をもつてしても、何に使うのか見当のつかないような怪しい機械に囲まれている。それでもなお、オレ様がテレポーターだと言わんばかりの

オーラが、見る者の心象に働きかけていた。

「おお、ワープだあゝっ!!」

と、小学生のようにキラキラとした何かを周囲に浮かべているカルミアは意識から排除して、職員の人説明を仰いだ。

すると、ちょっとした確認をすれば、もう乗っていいと言う。それを手短に済ませた俺達は、早速テレポーターの方へと近づいてみた。近くで見ても、何に使う機械なのか分からないくらいシンプルな造りをしている。しかしそれがまた、この機械を異様にしていた。「どこでもドア」のように、考えれば考えるほど奇妙^{ヘンテコ}珍妙なのだ。

さっきまではしゃいでいたカルミアはというと、まるで人が変わったように俺の背中をつまんで、恐る恐る俺の後ろをついて来ていた。まるでお化け屋敷に來た子供みたいで面倒だったのは言うまでもないが、カルミアでも多少の不安は感じるのだということに、少しホッとしたのも事実である。

だったらなおさら、こんなところで男の俺がビビるわけにはいかない。自尊心と緊張と好奇心が、俺の右脚をテレポーターの上に誘^{いざな}う。

振り切れてもなお回ろうとする計器のような、どこまでも跳ね上がる高揚感。その針が指すのは、湧きあがる期待の容積だ。それを邪魔するように、限界を知らせる非常ベルのような不安が鼓膜をノックする。

そこで職員に目を閉じるよう促される。

視覚を失った俺に、機械のモーター音が挨拶^{あいさつ}する。針はもっと回

らせるとばかりに煙を吐き出した。モーターの小さな振動が足の裏から伝わって来る。隣のカルミアはそれに驚いたのか、俺の左腕を思い切り握ってきた。そこで自分の全身が強張っていることに、初めて気付く。途端に針は遙か彼方へ吹っ飛んだ。機械で計測不能な領域も、とつくに過ぎてしまったらしい。この腕を掴つかんでいるカルミアの手が震えているのは機械の振動のせいだろうか。それとも怯おびえているのだろうか。その答えは、吹き飛んだ針が指し示してくれるかもしれない。

こんな時間が、もう少し長く続いたら……。

葦沢亀執筆 第二話（後書き）

最後までお読み頂きありがとうございます。

何だかハーレムフラグが立っていますが、意図して書いているわけではなく……（それはそれで問題ですが）。

早いところ流峰君には男友達を作ってもらわないといけないですね。個人的に腹が立ってます（笑）。

まあ、そのうち書くでしょ、って感じでゆる〜く考えてますが、どうぞこれからもよろしくお願いします。

葦沢亀

戸山羅花 2話（前書き）

ちよつと急展開

戸山羅花 2話

「……………」

……………重い。

「影原くんどうしたなの？ 随分疲れた顔してるなの」

「……………誰のせいだと思ってやがるっ！」

榎原は現在、俺の背中の上にいる。

「大体お前、なんで関係のない俺を巻き込むんだよ！」

時はつい十五分前まで遡る。

「……………よし。いいか、今日はお前達各人が対戦形式で訓練してもらう。だからって殺すなよ！ 戦闘不能判定が出た時点で止めること」

だったらやらすなよ……………。

そう思ったが、適当に人を探すことにする。

「影原くん」

後ろから声が掛かった。大柳だ。

「どうだい？ 良ければ手合わせ願いたいんだが」

「……………そうだな。いいぞ」

一瞬榎原のことも頭に浮かんだが、流石に女の子相手に攻撃を仕掛けられるほど人外じゃない。

「じゃあ、お手柔らかに願うよ……………ってうわああ！」

「……………はずれか」

挨拶している大柳に闇の矢を放つが、寸前で避けられた。

「おのれ卑怯な！ いきなりやるかい！？」

「いいじゃねえか。どうせ戦闘不能判定が出れば終わりなんだ。…

…黒き漆黒なる闇よ。鋭き槍となりて光を突き通せ。」

手に闇の槍を構える。

「いいだろう。本気で行くぞ！ 黒き漆黒なる闇よ！ この手に黒刀となりて顕現せよ！」

……闇の刀か。そういや習ったな。今度使ってみるか……。

そんなことを思っている間にも、大柳はどんどん近づいてくる。

「覚悟っ！」

大柳が黒刀を振り下ろすと同時に横へ避け、槍を振り回す。

「はっ！」

大柳はそれを後転して避ける。

「運動能力は高いみたいだなっ！」

「まあ、ねっ」

続けて振り下ろした槍を黒刀が受け流す。何度か剣劇が繰り広げられ、それぞれの武器を押し付けるように合わせる。

「……くっ」

このままでは決着が着きそうにないので、勢いよく大柳を飛ばす。

「……いい加減決着つけねえとな。他の奴ともやりたいし」

「それは負けの合図かな？」

「ふん。そっちがな」

目を閉じて心を落ち着ける。昔、祖母から教わった精神統一だ。

「……なっ！？ 影原くん！？ なんだいその技！？」

「……え？」

大柳の余りの驚きように、目を開く。……相変わらず槍はそのままだし、とくに術式を開いた訳でもない。一体何に驚いたのか？

「い、いや、君……」

大柳が更に続けようとした時だ。

「榎原さん！？」

「っ！？」

少し離れたところに人だかりが出来ている。

「あいつ何かしたのか!？」

慌ててその人ばかりに向かう。そこで目にしたのは……。

「大丈夫なの。ちよつと足切っちゃっただけなの」

足から血を流した檣原がいた。

「檣原!」

「あ、影原くん。どうしたなの?」

「いや、お前その状況で聞くか!？」

「……あ、もしかして私のこと心配してくれたなの?」

「ぐっ!？」

言葉に詰まる。実際そうなのだが、この大衆の前じゃそんなことは言えない。しかも変な誤解だってあるというのに!

だが、その沈黙が、余計に心配していたのだと雄弁に語っていた。

「……やっぱり影原と檣原付き合ってるんだな」

「格好いいねー。自分もそんな奴になりてえよ」

周りが小声で冷やかしている。

「ん? なんだ? 影原がどうかしたのか? 先生分からんぞ?」

「影原くんが救護室に送ってくれるなの」

「あーなるほど。自主性があっていいな、影原は。じゃあ頼むぞ」

……頼むぞってなんだよ。救護室? どこだよ。

「……チッ。仕方ねえ。おい檣原、立てるか?」

「ん……。無理かも、なの」

「つたく。どうしたらこんな傷が出来るんだよつとおお!？」

素早く後ろに回り込んだ檣原が背中に乗ってくる。

「……よし、なの」

「よし、じゃねえ! いきなり乗るな! 何かに取り憑かれたかと思っただわ!」

「まあまあ、じゃしゅっぱーっ!」

「お前なあ……」

で、現在に至る。

「もう少し気を付けろよな？　そもそもお前の能力は戦闘向きじゃないんだから」

「……ごめんなさいなの」

素直に謝る榎原。

「で、なんであんな事になったんだ？」

「えっと、まあ、簡単に言うと相手の攻撃が当たって、運悪く切れちゃっただけなの。さして大けがでもないなのよ？」

「そうか。まあ、余り無理はしないことだな」

「分かってるなの」

「信じられないんだが……」

榎原の案内の下、救護室へと向かう。しばらく二人は、無言で歩いた。

「……影原くん」

「んー？」

「……こんなこといきなり言ったら変かも知れないけれど」

「お、おう」

「なんか榎原、元気ない？　反省してるのか？」

「……………」

「……………」

「だが、しばらく待っても何も言わない。」

「……どうした？」

「……んー……………」

何か考え込んでいる様子の榎原。

「よし！」

「へ？」

「私は決めたなの！」

「何をだよ」

「私は強くなるなの！」

「あ、おい。ここ曲がれば精神科だつて。行くか？」

実際は勿論、そんなものはない。

「酷いな！ 私の一大決心を！」

「いやだつて、お前サポーターじゃん。お前が強くなってどうするんだよ」

「力強くサポートするなの」

「無駄だな、おい」

そんな下らない話をしながらようやく救護室へ着く。

「ほら、降ろすぞ」

「はいはいーなの」

……届けたあとつて、どうすんの？

「……帰るか」

「うわああ待つてなの！」

「ぐはっ！」

背中にタツクルされて、前に倒れそうになる。

「やだ……」

「え？」

「どこにも行かないで」

「な……」

顔を見られてはいないのが幸いか、余りに唐突過ぎる発言も、パニックに陥ることはなかった。

「……ダメ、なの？」

「……いや……分かった」

檜原は小さく微笑むと、倒れ込んだ。

「あ、おい！ てかなんで誰もいないんだよ！ どうしろとー!?」
周りを見渡す。ふと、ある貼り紙が目に入った。

『治療の手順』

「自分でやれっつかあ!？」

酷かった。放任もいいところだ。

「くそっ！ おい榎原！」

呼んでみても、当然ながら気を失っている。

「ああもう！ どうなっても知らんぞ！」

貼り紙を剥がし、手順を確認する。

「傷の深さを確認する？ …… 榎原、すまん」

かなり気が引けるが、仕方なく榎原の足を確認する。

「…… 出血は多いが…… 余り深くもなさそうだな」

未だに血は流れているが、そこまで酷いわけでもなさそうだ。：

それにしても随分白い足だなあ……。なんで女子って日焼けとか

嫌うんだろ。全部が全部そうじゃないしろ。

「って何考えてやがる俺。…… 傷はそんなに深くないから消毒か。

綿にピンセットと…… エタノール」

綿にエタノールを染み込ませ、榎原の怪我した部位を拭いていく。

「意識があつたら痛いだろうなあ」

ないから関係ないのだが。

「縫うほどではないにしろ、傷口が大きい……。ガーゼと包帯だなこりゃ」

その作業は、座らせたままでは出来ないので、空いているベッド（全部）の一つを使わせもらうことにする。

「意外と軽いなあ榎原は。ちょっと軽すぎるような気もするけど、女子じゃこの位が普通なのか……？」

ともあれ、無事に寝かしつけると、手際よくガーゼと包帯を巻いていく。

「……これで、よしと」

途端にやることが無くなる。

「……………」

帰ろうか、とも思ったが、先程の檜原の言葉が蘇る。

『どこにも行かないで』

珍しいことに、なの、をつけていなかった。いや、そんなことはどうでもいい。

誰かいるわけでもないが、一人で勝手に恥ずかしくなり、無理やり考えることを止める。

「……………仕方ねえ」

ベッドのそばは檜原に悪いと思い、先程檜原が座っていた長椅子に座った。

考えるのを止めても、こうしていると嫌でも思い出してしまう。背負っているときも、いきなり黙りこくったりして。どうしたんだあいつは。何かあったのだろうか。

右の脇腹が冷たいものに触れ、シャツをどかすつもりで引っ張ってみた。

「……………濡れてる？」

いつの間にかシャツに水が染み込んでいた。いや……………違う……………これ……………。

「檜原の血だ……………」

上下とも黒い服装なので、見た目は分かりにくいが、微かに鉄のような匂いがした。

本当に大した傷ではないのか。気になって檜原のベッドを覗いてみる。

包帯の巻かれた部分はどうってこともないように、元の白いままだった。

「良かった……………」

思わず安堵する。

「……………う、ん……………」

檜原が眉をしかめる、気がついたのだろうか。

「……あ、れ……私……」

榎原がゆつくりと目を開ける。

「おう、気がついたか」

「……あ……影原、くん……」

「悪いな。勝手ながら治療させてもらった」

「……え？　これ、影原くんが？」

「おう。まだ痛かったりしたら言ってくれ。あ、あと、お前の足には殆ど触ってないからな！　誤解すんなよ！」

「……ふふっ」

「……な、なんだよ」

榎原は小さく頭を振ると、笑みを浮かべながら言った。

「ありがとうなの」

不覚にも、見とれてしまった。

> i 1 7 8 8 8 — 1 3 2 1 <

「あつ、ああ。まあ、教師がいなかったから仕方なくだ。じゃなきゃこんなことしねえよ」

「分かったなの。さて！　戻りましょうなの！」

「……お前立てるのか？」

大丈夫なの。と言って起き上がってみせる。だが、こちらに歩き出すとやはり怪我した方は辛いようで、僅かに顔をしかめた。

「あーあーほら。俺が言つといてやるから、寝てろ」

「帰ってくるなの？」

「あー……昼休みに迎えにくるさ」

「ならいいなの。行つてらっしゃいなー」

榎原はいつの間にか元通りになっていた。

教室に戻ると、好奇の視線が向けられたが、それらを無視して席に着く。クラス担任、能登^の孝^{たかし}には既に報告してある。

「やあ。榎原さんは平気だったのかい？」

「……大柳か」

机の前には大柳が立っていた。

「……榎原は平気だ。それより気になることがある」

「？ なんだい？」

「お前はあの時、異様なまでに俺に驚いていたよな？ なんでだ？」

「……訓練のことかい。そうだな……今となつては見間違いかもしれないけど、あの時、君が目を閉じると黒いオーラのようなものが見えた……。それだけさ」

「オーラ……？」

「ああ。目を開ける時には消えてしまっただけだね」

「なるほど……。悪いな」

「いやいや、困ったときはお互い様さ」

大柳は軽く手を挙げるとこの場を去った。

能登は榎原のことを手短に説明すると、さっさと魔素に関する説明を始めた。

榎原のいない授業は、何故かつまらなく思えた。

「……一人、かあ」

影原くんが救護室を去っていった後、程なくしてクラス担任の能登がやってきた。彼は怪我のことでいくつか質問した後、「今度は気をつけろよ」と言っ出て行った。

……暇だなあ……。

「さつき、言っちゃえばよかったのかなあ、なの」

さつきとはつまり、影原くんがここへ運んでくれているときのことだ。

『……こんなこといきなり言ったら変かもしれないけれど』

あの時、本当はまったく別のことを言いたかった。

『強くなるなの』

そんなことを言いたかったんじゃない。なのに、口から出たのはそんなことだった。意思とは無関係に動く口。お陰で影原くんは何も気付かなかった。ただでさえ鈍いのに。

そして、影原くんがいないこの空間はとても空虚なものに思えてきた。

自分でも認めている感情。たった二文字の言葉でさえ、私は口にすることが出来ない。

「……逢いたいよ……影原くん……」

「何か用か？」

ドアの前に、影原くんが立っていた。

「ふにゃああ！」

「おうわぁ！」

「な、なななな、なんでっ！ こ、ここにっ！」

「い、いや、昼休みの時に榎原の弁当持ってくといろいろ面倒だから今のうちに持ってこようと……」

そう言っただけで影原くんは私に弁当を差し出す。

「……ほら」

「あ、ありがと、なの」

影原くんから弁当の包みを受け取る。

「……あの」

「なんだ」

「まさかとは思っけど……聞いてないよね」

「……何をだ？」

答えに一瞬間があつた。

「うわーん！ 聞かれたあー！ もうやだー！」

「なっ、仕方ないだろ！？ まさか俺だつてあんな場面に遭遇するとは思えなかつたんだから！」

「うう……。もうおむ……。じゃなくてお嫁にいけないの……」

「今確実にお婿つて言いかけたよな！」

やっぱり影原くんがいてこの空間が出来上がるんだ。空虚に思えた救護室も、今は確かに時を刻んでいた。

「……じゃあ、俺戻るから。遅刻したらまずいし」

「はいなのー。頑張つてねーなの」

影原くんは手を振つて出て行った。

「……ふう」

運がよかったのか悪かったのか分からないけど、影原くんが来てくれて良かった。

「仕方ないから寝ちゃいましょうなの」

布団をかぶつて目を閉じる。まだ怪我した所はズキズキと痛むけれど、先生は松葉杖を持つてくるって言つてたから、午後からは普通に授業を受けるけれど、

……もう少しこうしていたい、と思つた。

アンデルセン執筆 第二話

「おはよう!」

「あ、冬桜ちゃんに、誠治さんおはよう」

「いやー、冬桜ちゃん可愛いなあ」

「と言うか、誠治さんてお兄さんでいいんだよね?」

「じゃないの? でも二十歳過ぎの能力者って珍しいね、私初めて見た」

「うんうん……」

アカデミーの校舎から入り、その昔ながらの内部を進み、所属するクラスに誠治達が入った瞬間既に登校していた者達が声を掛けてきた。

冬桜はそれにびっくりし、誠治の後ろに隠れてしまう。

身長も高く、すらりとしていながらもそれなりに肩幅もある誠治が前に出れば後ろの冬桜の姿は消えたように見えない。

誠治も流石は年頃の少年少女達だと。その活き活きとした様子に多少苦笑しつつも、「ああ、おはよう」と答え席に向かう。

誠治が座る席は一番窓側の列、しかも後ろから二番目だ。

後ろは冬桜の席となっており、これは冬桜の虚弱体質を逆手に担任からもぎ取ったものである。

別のクラスでは自由だったり、あいうえおだったり様々だ。

このAクラスではあいうえお順で席が決められていた。

教室の内部は昔ながらの風情である。机こそ木製ではなく、特殊な材質だが。

木目まで綺麗に再現されており、教卓や黒板も変わらない。

学校によつては黒板の代わりにスクリーンを使用、チョークの代わりにP Cから出力された字や映像なんて場所もある。

それに比べれば前時代的な学校だ。尤も注意深く観察すれば、随所に最先端技術が垣間見えるだろう。

例えば窓ガラス。特殊強化硝子であり、僅か数ミリの厚さの癖に通常の銃弾はおろかライフル銃でも罅が入らない。

二重式の為、下手すれば旧戦車の百八十三ミリにも耐えられるのではないだろうか。

少なくとも手榴弾程度では破ることは出来ない。

そもそも校舎自体が爆撃されてもビクともしない作りだ。核対策までされているという噂もある。

見た目は昔ながらの教室だが、使われている材質は最先端。

と言うか、この島には様々な軍事機密に通じる技術が盛り沢山だ。下手をやれば首が物理的に飛びかねない。そんな情報を前もって誠治は知っていた。

一見一般人の誠治だが、昔はそれこそ思い出したくもない環境下であった。

その際に得た伝からの情報である。正直利用したくないタイプのコネではあったが、すべては冬桜の為である。

誠治はシスコンだ。本人も自覚している重度のシスコン。

冬桜を傷つける相手は恐らく生きてはいられない。物理的に、事実として。

誠治は人を殺した経験がある。忌々しいが冬桜もだ。

昔は今ほど明るくなかった。これほど元気になったのは奇跡と言っている、そしてその明るさを取り戻したのは己だと言う自負が誠治にはある。

だからこそ冬桜には二度と辛い思いはさせない。そう誓ったのは十歳にすら満たない時だったか。

冬桜にはテレキネシスの才能の代わりに体が少し弱かった。

では誠治のパイロキネシスに代償はなかったのかと言えば、ノーだ。

むしろ表面上には分らない、冬桜以上の障害を抱えている。

そもそも冬桜だからこそ、その程度の代償なのだ。劣る誠治がそれ以上の代償を支払っているのは当然の帰結。

そしてその代償とは“感情の欠落”である。

誠治には喜怒哀楽のうち、喜の殆どと、哀の一定割合を感じられない。

情報としては理解しても、それを己で感じる事が出来ないのだ。

そしてその影響か、誠治の道德観念は一部壊れている。

生き物を殺傷することに罪悪感を抱かない。零ではないが、それに近い。

だからこそ誠治は必要と判断すれば、躊躇なく他者を害せる。

そして冬桜を傷つける者は皆その範疇だ。彼女こそ誠治の人生すべてを捧げるべき相手なのだから……

「兄さん？」

思考に耽っていたら冬桜が声かけて来た。

誠治は何でもないよと、突き出すように前かがみになったその頭を撫でてやる。

冬桜は誠治の感情の欠落を知らない。教えるつもりもない。情報としてさえ理解できれば、それらを装うのはそう難しくないのだ。

満足そうな顔をして席に座り直す冬桜。壁に掛けてあるアナログ式の時計を見れば、間も無く担任が来る頃だろう。

——ガラガラッ！

「よし、全員揃っているな。前日も話したが、私が君達の担任となる倉橋だ。残念がら特殊な能力はないが、それでも軍に所属していた。君達とは肉体的な格闘訓練などを教える仲になることだろう」

どうやら日本人らしい、身長の高い、すらりとした体格の反面、実用的な筋肉を供えた三十代程に見える男性が教卓で告げる。

「よし、それじゃあ簡単な連絡事項を伝えるぞ」

そう言って話し出す教員を横目に誠治は人知れず話を聞き流していた。

元よりパンフレットや事前資料で、あらかたの必要事項は頭に叩き込んでいる。

今倉橋教員が話している、魔物とそのノルマについて。

それが生徒会より生徒に課されるものであり、まだ戦闘訓練すらしていない一年は暫く自由意志で受けるか決めても構わないこと。

基本的に一般的な授業は行われず、格闘や武器訓練、他は自習と言つ名の能力訓練が殆どであること。

それらを聞き流し、イメージトレーニングを繰り返す。

前にも説明したが、誠治の能力はイメージ力や発想がものを言う類のものだ。

イメージ力とはかく、発想に関しては人並みであると認識している誠治は、その分を補う為にイメージ力を常に鍛え続けている。冬桜のように天才ではなく。精々が秀才に過ぎない身だからその足掻きだ。

秀才が天才を守るには努力が必要だ。それも生半可ではない類の。性質が悪いことに、冬桜は天才であるのと同じ、努力を怠らない。お陰で誠治はこうして日常を犠牲にして、能力の制御に磨きをかけるのだ。

ふと気づけば倉橋教員の話しも終わり前になっていた。

「今週中にクラスの代表を一名選出するから、取り敢えず明日までに考えておけ。最悪適当に先生が指名する事になるぞ」

そう告げるといかにも面倒だという表情をクラスの全員が浮かべる。

進んで厄介ごとを引き受けるのはお人好しか、何か打算を働かせている者くらいだろう。

誠治にしたって、放課後を縛られる可能性のある代表をやるつもりはない。

それが青春真っ只中の学生であれば尚更だろう。

「よし、それじゃあこれでLHRを終了する。一時間目は引き続き各授業の説明だから、しっかり聞いとけよ」

そう言つて倉橋教員が教室を出て行く。同時ににわかに活気付く教室内。

今日からとうとう本格的な能力や戦闘訓練に触れることになるのだ。

ちよつと夢見がちな人間であれば、誰もが気分をわくわくと躍らせる展開だろう。

誠治からすればそんなものより、平穩な一日の方が素晴らしいと思うのだが、それでもその気持ちを否定するつもりはない。

椅子の向きを変え、後ろに振り向く。同時に余計な虫が寄らないように睨みを利かせるのを忘れない。

誠治はともかく、冬桜はこの教室内のメンバーと同年代なのだ。それに質問攻めなどにあつて体調を崩してはたまらない。

「どうかしましたか兄様」

「いや、とくに用事がある訳ではない。体調はどうだ？」

「大丈夫です。今日はむしろ調子がいいくらいですから」

誠治の質問に軽く握りこぶしまで作つてアピールをしてみせる。しかし残念ながら華奢な少女の二の腕では、ぺたりとするばかりで力強さは皆無だ。

「そつか、ならいいのだが。今日私は能力訓練の為訓練室へと行くが、冬桜はどうする？」

「それなら兄様についていてもいいですか？」

「構わないが、先に帰宅してもいいんだぞ」

「一人で帰っても寂しいだけですから」

「分かった。今日は午前授業だから、どこかで朝食を取る必要があるな……」

今日は授業の説明や、簡単な施設見学だけで終わる。

遅くても十一時を超える事はないだろう。

基本的にこの学園は弁当持参、あるいは食堂の利用で昼食を取る必要がある。

誠治も冬桜も料理は出来るが、引越したばかりで器具は無論、材料の買い込みすら終えていない。

そうなると自然取れる選択肢は限られてくる。

この辺りは全て特殊戒厳令によってアカデミー関係者以外、一般人は誰一人として存在していない。

定食屋なども勿論存在していないのだ。

「冬桜、少し能力の訓練をした後、昼食は学園で取ることになるが構わないか？」

「はい、食材もまだ買ってないですものね」

「その通りだ。帰りはその辺の雑貨類も買わないといけないな」

「兄様、この辺に売っている場所なんてあるのですか？」

きょとんと首を傾げる冬桜。先も書いたとおり、ここら一帯はアカデミー関係者しかない。

冬桜の疑問は至極当然のことだ。同時に、解決策も誠治には用意されている。

「この学園の地下は巨大な商店街みたいになっているらしい。食材は無論、ある程度の雑貨や娯楽品は揃うとのことだ」

「学園にそんな場所があるのですか……」

まさか学び舎たる学園の地下に、そんな場所があるとは思っていなかったのか、冬桜の顔が驚きに染まる。

誠治だって事前資料を見たときには驚いたものだ。しかもその地下街、中には非法な品まであると言うのだから笑えない。

勿論普通に探して見つかる類ではないが、それでも明確な情報と意思があれば見つかることだろう。

冬桜とその後も他愛無い雑談を交えつつ、この後一日の予定を組み立てていくのであった――

――その後、担任の倉橋教員が戻り、授業やその他の説明。更には施設の説明や簡単な紹介などで三時間を潰し、その日の授業は終了となった。

生徒しての役目。生徒会より課せられるノルマ、それと与えられるポイントの説明もされた。

幸いまだ戦闘訓練皆無のおかげで任意性だが、それも一週間も経てば強制にはや代わりである。

それまでに少しでも能力や肉体を磨き、来る日に備えないといけない。

表沙汰にはなっていないが、魔物との戦闘で命を落とした者は実は多い。

転校その他を理由に一般生徒には知られていないが、特に一年生は最初の一月で十名近く出る場合もあると言う。

この学園は生徒に様々な恩恵を与えてくれる。
それは例えば金であったり。名声であったり、あるいは権力かもしれない。

男であれば女だって用意してもらうことも可能だろう。女の場合

もしかりだ。

だが忘れてはいけない。学園なんてスタイルを取っているが、この地は治外法権なのだ。

表に存在は伝わらず、起きた不祥事は人知れず闇に屠られる。

学園と言うスタイルである理由は、能力者同士の殺傷沙汰を少なくする為、あえてモラルを学ぶ場として最適だからだ。

能力者の能力は幅が広いが、使い方次第で小隊や中隊を相手取る事も可能だろう。

それは自身が殺傷性の高い能力者だからこそ、誠治はよく理解していた。

「ここが耐火に優れた訓練室か」

「広いんですね」

冬桜の言うとおり、訓練室はかなり広かった。具体的には全生徒が入れるくらい。

長方形型の、縦百メートル、横七十メートル程度だろうか。

どうやら誠治と同じ考えの生徒が居るらしく、一年らしき生徒が二名バラバラと発火系の能力訓練をしている。

人数が少ないのは訓練室の数が多いからだ。訓練室だけで数十ありと資料には書いてあった。

防火性の厚い扉を閉め、だだっ広い空間の右奥まで移動する。

そのまま深呼吸を繰り返し、大気に溶けている魔素と呼ばれる粒子。

それを身体中に巡らせるイメージを浮かべる。誠治の場合は血管に流れるイメージだ。

そしてそれらを必要箇所に送り出すイメージを作る。
今回は肩慣らしに指先に集中していく。

すると一秒も掛からずにライター程度の火が、指先からゆらゆらと揺れながら顕現した。

「流石です兄様！」

「この程度、能力者になる前でも簡単だったろう？」

「そ、それはそうですけど……」

「それより本番だ。折角だし冬桜も体調が悪化しない程度にだが、私と訓練をしないか？」

「にいさま、と？」

首を傾げ、きょとんとした表情を見せる冬桜に苦笑してしまう。

「ああ、私が攻撃用の炎を創り出すから、冬桜はそれを片っ端から消していつてくれ」

「危険ではありませんか……？ 私の能力は制御を誤るとんでもない被害が出てしまいます」

「冬桜が心配するより、私が能力の制御を失敗する可能性の方が高いよ」

そんなことはありません！ と早口で反論するも、事實は事実だ。
冬桜程流麗なESP使い——今は能力者だが——は少なくとも、誠治は見たことがない。

水が流れるように淀みが無く、綺麗なのだ。

まるで行つべき道筋が見えているような能力捌きは、兄である誠治ですら時に背筋が寒くなる。

だからこそ万が一などありえないのだが。冬桜は本気で心配して

いる。

もう少し自信を持つべきだと誠治は常々思っていた。

「よし、話しはここまでだ。始めよう」

「……分かりました。危なくなったら直ぐに止めますからね?」

「ああ、それでいい——」

そう言った瞬間、二人の纏う空気が変化した。

ぴりぴりとした緊張感を孕み、空気がまるで重みを持ったかのような重圧感を備える。

誠治が鋭い呼気を吐き出した瞬間、瞳が赤く染まっていく。

能力を一定以上行使した時に起きる現象だ。

一方の冬桜の瞳もまるで氷のようなスカイブルーへと変貌している。

対照的な瞳を発現させ、二人は能力を解放させた……

アンデルセン執筆 第二話（後書き）

後書き

諸事情で一周飛ばしてもらいました^^；
申し訳ありません。

数話先では四人で同じイベントに入るのでよろしくお願い致します。

アンデルセン執筆 第三話

イメージを集中させる。具象化するのは進む炎だ。

右腕を基点に、燃え盛る炎が逆巻き相手を飲み込むイメージ。

その際に重要なのが、防がれるイメージをしないこと。

そしてその熱量が膨大であることだ。

もう過去何度となく繰り返されたイメージの反復。

その効果が如実に現れ、誠治の右腕に一瞬で炎が現れ濁流のように冬桜へと襲い掛かる。

「壁よっ！」

冬桜が叫ぶのと同様、まるで見えない壁に弾かれるかのように宙で炎が霧散する。

「それなら。まるで踊り狂うように襲い掛かれッ！」

弾かれるより早く、まるで予見していたかのように誠治が次の行動を先んじて起こす。

イメージするのは本来ならありえべからざる炎。

指の先に鋭い鉄鋼鉤でも付いているかのような勢いで、両腕を地面に向かって振り下ろす。

瞬間腕より放たれたオレンジ色の炎が地面にぶつかり弾け、その千切れ飛んだ筈の炎が個々に揺らめきながら冬桜へと次々群がり始める。

同じ行動を二度、三度と繰り返せばあつと言う間に冬桜の周囲は大きな様々な炎が踊り狂う地帯へと変貌。

それでもまるで球体状の力場でもあるように、一定以上炎が進入しようとする弾かれ霧散してしまう。

だがそれも誠治の想定範囲内だ。この炎は罔に過ぎない。

見た目は派手だし、数も多いが、温度は低く、ギリギリ炎としての体裁を整えているレベルだ。

それでも炎には変わらないし、人間の本能的な部分でこの数に襲われれば防御してしまうだろう。

一塊直径三十センチ程の炎が百近くも群がり、次々と冬桜へと飛び込んで行く中で誠治は極度の集中へと埋没していく。

次に使うのは大技だ。それゆえに溜めが僅かなりとも必要である。鋭い呼吸法を行い、肉体に酸素を行き渡らせ、右腕の望む炎をイメージしていく。

強固なイメージと想像はそれだけで力となる。

本来なら物理を超えた現象すら可能だが、誠治は科学的な側面で物事を捉えてしまう為、能力の使い方もそちらに偏りが出来てしまう。

時間にして数秒にも満たない時間。それを迎えて誠治の右腕に明らかな変化が生じた。

青い、まるでたゆたう海の如く深い青を讃えた“青炎”。

温度にして優に四千度を越す超高温。様々な物理的障害を突破する破壊の権化。

この訓練室の耐火温度ギリギリであるそれを、誠治は容赦なく冬桜へと向けて放つ。

まるで相手に殴りかかるような格好で右拳を打ち抜く。

手繰り寄せられるように吹き上げたブルーフレイムが、産声の如き咆哮——空気を驚異的速度で燃焼する音——をあげて冬桜へと踊

り掛かる。

残っていた踊る炎を全て呑み込み、まるで蛇の如き動きで見えない壁へと突き立つ。

「……ッ!？」

そこで初めて冬桜の顔に緊張が走った。

今まで揺らぎもなかった透明な力場が、ブルーフレイムの熱量に押し負けるように少しずつ後退していく。

圧倒的な熱量が酸素を燃焼し、同時に周囲の温度を際限なく上昇させながら、その破壊の牙を次々と突き立てる。

持続的に吐き出されるブルーフレイムを維持する為に、大気中の魔素をかき集めるイメージを常に保つ。

それでもここはほぼ密室の訓練室だ、魔素には限りがある。

それを悟った誠治がブルーフレイムを一度更に勢いを増して放つ。滝が横にすべるような勢いで襲い掛かり、冬桜のテレキネシスにより張り巡らされた防御フィールドが大きく撓む。

その隙に誠治が瞬く間に力場の前まで詰め寄り、その右拳にブルーフレイムを纏わり付かせて力場。

冬桜曰く、“エルフィールド”に渾身の一撃を叩き込む。

まるで硬質な壁にでもぶつかったかのような衝撃が手に走る。

それでも構わず一度、二度、三度……両拳に炎を纏い殴り続けていく。

ただのブルーフレイムではない。本来ならあり得ない効力を付与されている。

拳を防護すると同時、衝撃から守る高熱の塊。それは不定形な

流動体に近い。

「ハアッ！！」

一際力の入った一撃がエルフィールドに突き刺さる。
瞬間、まるで硝子が砕け散るような感触と共に抵抗感が消えうせた。

いける、そう確信して一歩踏み込んだ時、腹部にまるで砲弾でも打ち込まれたような衝撃が走り、そのまま数メートル後方に吹き飛ばされていく。

宙を滑空した肉体は重い衝撃と共に背を地面に叩き付け、肺から強制的に空気が漏れ出す。

溜まらず咳き込めば慌てて冬桜が駆け寄ってきた。

「に、兄様！？ も、申し訳ありません！ まさかエルフィールドを突破されるなんて思わなくて、反射的に……」

「大丈夫だ。能力者になって肉体的にも強化されている、これくらいどうってことはない」

そうは言うものの、先程冬桜が反射的に放った物理的エネルギーの塊は相当なものだ。

通常の人間であれば容易に肋骨が砕け散っていたことだろう。

青い顔をして慌てふためく冬桜に苦笑を浮かべ、何でもないと立ち上がり頭に手を置くと口を開く。

「次は精密訓練に移ろう。訓練室の魔素を消費しすぎる訳にもいかないだろう」

「分かりました……本当に痛くはありませんか？」

「多少の痛覚はある。それでも骨に異常はない」

「そうですか、よかったです」

ほっと息を吐いて冬桜が離れていく。それを見届け、再び全身に魔素を流し込むイメージ。

再び誠治の瞳が赤色に輝き、その両腕に赤いオレンジ気味の炎が纏わりつく。

「それではいくぞ」

「どこからでもどうぞ、兄様」

頷き腕を振り下ろす。瞬間放たれたのは細かい炎の礫だ。

一つ一つの大きさは数センチ程度だが、それが一斉に何十と放たれる。

小さいと侮るなかれ。それでも命中すれば火傷、それも重度のレベルを与える代物なのだ。

それら炎の礫が何か見えない物体に叩き落されるように次々と霧散していく。

続いて放たれるのは炎の波だ、薄い波状の炎を幾重にも発生させ、波状攻撃の如く相手に襲わせる。

それを冬桜は同じエネルギーの波で相殺していく。

二つの波がぶつかり、その余波が周囲に散り、熱風と衝撃波が巻き起こった――

「月見蕎麦を一つ。冬桜は？」

「私も兄様と同じく、月見蕎麦を一つ下さい」

「あいよ、これをもって待っているな」

そう言って渡された番号札を持って適当に空いている席へと座る。周囲には他にも二十名程学生らしき人物がテーブルに座っていた。ここはアカデミーの第二食堂だ。食堂は全部で三まであり、微妙に品も違う。

偶々第二に来たのだが、麺系が比較的多いらしく、先程月見を頼んだのだ。

料金は携帯型端末機のＩＴＡで支払われている。

今では電子通貨は一般的に普及しており、むしろ通常の紙幣の方が少ないと言えるだろう。

「別に私に合わせる必要はなかったんだぞ？」

「偶にはお蕎麦もいいと思ひまして、迷惑でしたか？」

「いや、そんなことはない。ただ、私が蕎麦を好きなのは冬桜も知つての通りだが。冬桜はそこまで麺系を頼まないから珍しく思っただけだ」

そう、誠治は蕎麦が好きであつた。ラーメンも好きだし、うどんも好きである。

その中でも蕎麦を最も好んで食していると、誠治自身自覚があつた。

反対に冬桜は何かと言うとそう言う汁物はさほど好まない、そう今までの経験から思っていたのだが、今回はどうという訳か珍しく

も同じ月見を頼んでいる。

別に問いただすような事でもないのだが、ふと興味が沸いて視線で先をさしてみると、恥ずかしげに頬を染めて冬桜が告げた。

「えっと、笑わないで下さいね兄様？」

「恥ずかしいことなのか？ とりあえず私は笑わないから安心してほしい」

力強く頷く誠治にほだされたのか、完全に諦めた表情で理由を話し出す。

「汁物は汁が飛び散る事があって、その……兄様を買ってもらった洋服を汚しそうで嫌なんです……で、兄様！ 笑わないって言ったではないですか！？」

気づけば笑みを浮かべていたらしく、慌てて手を横に振る。

「いや、違うんだ。ただ、そんな微笑ましい理由だと思わなくてな。そんな心配しなくとも、冬桜の箸使いは見事だし、少しくらい飛び散ったって洗えば問題はないだろう」

「それはその……そうですね、気持ちの問題なんです」

何の気持ちの問題なのかは誠治には分からなかったが、冬桜も年頃である。

きつと女性的な思考なのだろうととりあえず頷いておくことにする。

そうして他愛無い雑談に花を咲かせていると、食堂の受け取り口、その上部の電子掲示板に誠治達の番号が表示される。

どうやら月見が完成したらしい。二人で席を立ち、受け取り口に行き蕎麦を受け取り戻る。

お盆の上にはお冷とどんぶりが置いてあり、匂いたつ出汁の香りが食欲を刺激した。

席に着き、二人で手を合わせると割り箸——人口木材——を割り、そのまま麺をずずつと口に含む。

「これは……」

「美味しい……」

「ああ、出汁の濃厚さが下手をすると飽きを呼ぶかもしれないが、それでもじつくりと煮込まれているんだろつ、使っている材料を聞きたくなる」

「駄目ですよ兄様、そう言つて前にお店の人、困らせていたでしよつ?」

「分かつている。しかし、皿を片付けるときにさり気無く聞くのは構わないだろつ」

「もお……」

そう言いつつも箸は勝手に麺へと伸び、気づけばあつと言つ間に麺は無くなつていた。

量は通常の一人前より多目のようであつたが、能力の行使により空腹を訴えていた胃袋の前には少々役不足であつたらしい。

能力行使のメカニズムはいまだブラックボックスな面が多いが、少なからずカロリーを消費すると言つのは有名だ。

水ではなく、蕎麦茶を啜り、見た目にそぐわぬ老成した雰囲気ですつと息を吐く誠治。

それを見てお爺さんみたいですよ、と冬桜が注意するが、誠治にはなんのその。

今まで何度となく言われてきたが、特に改めるつもりはない。そう言う微妙に頑固なところも誠治は持ち合わせているのだ。

ITAを取り出し時刻を確かめれば既に十四時だ、長時間の訓練は必要ないだろうと立ち上がる。

「兄様？」

「今日はこの辺りでいいだろう。取り敢えず食材を買って帰ろうと思うが、冬桜はどうする？」

「それなら私も行きます。ちょっと欲しいものもありますし」「分かった、それじゃあ行こうか」

そう言ってお盆を冬桜の分も持ち、そのまま下げに行く。

その時ついでに出汁の材料を聞くも、笑ってかわされてしまった。内心で残念だと呟きながら、アカデミーの地下へと向かう。

移動手段はエスカレーター、階段、もしくはエレベーターと豊富だ。

食堂の近くにはエレベーターとエスカレーター両方がある。今回はエレベーターを使い、地下一階へと向かう。

——チンッ——と言う音と共に扉が開く。

「広いですね」

「学園の地下全土に広がっているらしい」

誠治の言葉に驚きの表情を見せる冬桜。

学園の広さも半端ではないのだ。それこそ小さな空港レベルと言えるだろう。

それと同規模だと言うのだ、この地下は。

一体どれだけの店が存在するのか、数えようとして無駄だと冬桜は判断する。

そんな冬桜に苦笑しながら誠治が地下の大通りを進んでいく。

左右の道には様々な店が並んでいる。

電化製品店、本屋、あるいはデパートやパン屋、ゲーム屋などまであつた。

まるで節操のない闇鍋のようだと思いつつ、デパートではなく直接八百屋などによっていく。

途中で冬桜とは別れている。どうやら雑貨の方を買いに行ったらしい。

この時代、野菜などの自給率は世界レベルで下がる一方だ。

おかげで新鮮な野菜は非常に高く、下手をすると肉などを容易に上回る。

それなのにこの地下の八百屋はどれもみずみずしいものばかりだ。これは腕のふるい甲斐があると思ひ、気づけば両手にはずっしりとした強化ビニル性の袋が一つずつ。

肉や野菜は勿論、魚や調味料と、値段に質に驚きながら購入していたらこの有様である。

冬桜とは自宅で待ち合わせとしていた為、自身の両腕にぶら下がった二つの袋に嬉しいやら、消費できるかの不安やらで何とも言えない表情を見せつつ、誠治は主夫の如き姿で学園を後にした……

アンデルセン執筆 第三話（後書き）

誤字脱字など、何かありました感想までお願い致します^^

休憩所執筆 第三話

——鍋をやったその次の日。

当然だが、次の日はやってくる訳で、これまた当然だが朝日も昇る。

しかし、その「当然」な事実を受け入れがたい現実もあるわけで。

「はよ。」

朝ごはんもそこそこに、玄関のドアを開けるとそこには既に片識がいた。

昨日の事を根に持っているのか、いつものおっかない表情に更に眉間に皺という大変嬉しくないオポジション付きで立っていれば誰だつて嫌にもなるはずだ。

「…はよ。」

朝から特にワイワイはしゃぐ派でもない俺たちは、あまり会話もないまま教室へたどり着き、そのまま別れた。

今日の朝の会話で習得したことといえば、クラス分けは「能力値別」ではないということだろうか。
つまり、レベルEの能力者がAクラスに配属されたりしているということ。

片識は自分の能力とクラスが一致しているのは本当に偶然だ、と語

っていた。

昨日覚えたクラスのドアをひき、中に入る。

と同時にチャイムが鳴り響いた。

……。登校時刻、考えた方がいいかもな。

昨日も確か入ると同時にチャイムが鳴った気がする。

そして思った通り、昨日紹介してもらった担任が後ろから入ってきた。

「席に着けー！」

今日からは忙しいぞ！」

ドタドタと入ってきたのは、大量のプリントを抱えた担任であった。

「早く、早く！」

ドンツと教卓に全てのプリントを置き、俺たちの方を振り向いた。

慌て席に着いたのを確認し、プリントを配りながら担任は続けた。

「いいか？ この資料をよく見て、今後のスケジュールを考えるん

だ。
」

その配られたプリントには、“特別枠 一週間の予定”という見出しの下に、今日から週の最終日までの予定がぎっしり詰まっていた。

言葉のあやとかではなく、リアルにぎっしりと。

「「……………」」

クラスの全員がその意見らしく、全員反応はない。
というより、衝撃が大きくて声も出ないと言ったほうが正しいか。

「…みんなの気持ちは良く分かる、」

クラスの全員がだんまりの静かな空間を切り裂いたのは、担任の澄んだ声だった。

「だけど、やるしかない。」

そう。

本当にその言葉に尽きる。

——やるしかない。

この学園に来た時に覚悟していたじゃないか。

辛くても、大変でも、やってみせると。

——もう、俺のような被害者を出さない為に。

クラスの気持ちが団結し、担任は少しでも声のトーンを落とし話始めた。

「みんな、いいか？ 問題は週の一番最後なんだ。」

視線をすると下げて行くと、そこには“合同演習”の文字が。

——…え？

「この学園のモットーは、“習うより慣れよ”。
つまり、実践こそ最大の知識ってところかな。」

今からお前達には、とりあえずこの演習に向け、鍛錬をしてもらう。
魔物には知っての通り、物理的攻撃も効く物もいる。

お前達にはまず、この物理的攻撃が可能な魔物を相手に実習をして
もらって、闘い方を分かって貰おうということになる。」

ここまでで何か質問あるやついるかと、担任はクラス全体へと目を
やり、いないようだを確認すると、また話始めた。

「そこで、お前達にはまず“チーム”を組んでもらう。」

「…チー…ム？」

誰かが呟いたそれにも、担任は優しく返した。

「そう、チームだ。

これはどのクラスも同じだし、全ての戦闘に対しても同じだが、

お互いの欠点を埋めあうという役目や仲間意識、まあ…他にもいろいろと個人よりは有利に働く場合が多いんだ。

「

なるほど、たしかにそうかもしれないな。

人間である以上、欠点はあるし、寂しさは人を臆病にさせる。

「そこで、お前達には休み時間明けまでに、チームを組んでもらいたい。

ちゃんと特性とか相性とかも考えて組めよ！

じゃ、ホームルーム終わり！」

担任は、何かあったら俺職員室にいるから！
という言葉を残し、部屋を出て行った。

一方、俺たちと言えば糸が切れたように皆話だし、仲間同士で集まったりしている。

この様子だと、すぐにチーム分けは出来そうだ。

——俺以外は。

初日に出遅れた男にとって、”チーム分け”なんて不利だ。

どうしよう。どこかに無理に入れてもらおうかな。
そう思い、とりあえず席から立つ。

「あ、あの、」

控えめにかけられた高めの涼やかな声に反応し、首をそちらへと向ける。

そこには、黒髪短髪でいかにも気が弱そうな女の子が立っていた。

——あ、昨日の…。

その子は、昨日たった一人質問したあの子に間違いなかった。

その子は少し迷った後、目を思い切りつぶりながら勢いよく言葉を発した。

「あ、あ、あのッ！わ、わたし榊原 恵っています。」

よければチーム、わたしと組んでもらえませんかっ」

びくびくと返事を待っている女の子に、なぜそこまで怯えているのか疑問に思ったがそれよりなにより、

——か、かわいい。

榊原恵は本当に可愛かった。

しかし、だから組む、という訳にもいかない。

このチーム分けは恐らく自らの命運をも左右する。
安易に決めるわけにはいかない。

「あ、えと。その…」

かと言って、こんなに可愛い女の子に声をかけられ無下に出来るはずもない。

どうすればいいんだと内心わたたしている俺の背中に小さな衝撃があたる。

だいたい腰あたりをトントンと突いている原因を知ろうとぐるりと体を反転させる。

——あれ？

だがしかし、目線の先に人物の影はない。

おかしいな、気のせいかな？

そう思い、再度体を元の位置へ戻そうとした直後だった。

「我を無視するな、阿呆め」

そう耳で聞いた次の瞬間、先ほどとほぼ同じ位置から信じられない衝撃波を受け、前方へと倒れた。

「っ！？」

なんとか足を踏ん張り、ガバツと振り向く。

だが、やはり人影はない。

「一度ならず二度までも、我の呼び掛けを無視するとはお主、覚悟は出来ておるのか。」

やたらハスキーな声の方へと視線を向けると、そこには信じられない光景があった。

——ね、こ？

正確には、二足歩行している猫のような生物。

いや、でも、しかし。

「ねこ…だよな、間違いなく…」

白地に茶色の斑点のある可愛い猫は、服や靴まで着ていた。

それが余計にアンバランスで、こちらを混乱させる。

「…ねこ、か。懐かしい呼び名よ。」

しかし、我には立派な名があるのだ。

主とて、“人間”とか“人類”と呼ばれ、嬉しい訳なからう。」

いやに偉そうな話口調なのはさて置き、確かにもっともだなとひとり納得する。

元来、“名前”とは同種の生き物を個別に区別しやすいようにつける物であるように感じるし、やはり猫の言う事は正しい。

「あ、あの…」

猫に名前を聞こうと口を開いたと同時にくらいに背後から声が聞えた。

榊原恵だ。

彼女は猫を見つめ、猫もその視線を真っ直ぐにつける。

なんだ、これ。

なんの時間だよ。

なんだか二人の間にほわほわした空気まで流れてるしッ

まさかの猫と美少女の恋物語の始まりか！？

そんな葛藤をしていることも知らず、少女は静かに口を開き、

「ね、ねこさんは…三毛猫…なんですか？」

と発した。

「え？」

そこ気にするところっ！？

心の中で突っ込んでいると、ハスキー声が一拍置いて聞こえた。

「ああ、いかにも。」

「いやいや、お前も答えるなよっ！？」

なんだ、こいつら新手の天然なのだろうか？

…だとしたら、丁重に断らねば。

天然美少女と2人、というのは魅力的だが、この流れで行くと確実に、二足歩行する猫と天然少女と俺というなんともアンバランスなパーティーになってしまう。

正直、面倒はごめんだ。

声をかけてくれた榊原恵には悪いが、ここは丁重に断ろう。

——ああ、でもこれで美少女との青い春はなくなるわけだ。

さよなら、俺の青春…。

…ちよつとでも、青春の扉を叩けただけで俺は満足だったよ。

「主、主。」

「あ、あの…」

回想が終わり現実にフィードバックしてくると、目の前には、そろそろと覗きこんでくる榊原恵の姿があった。

「つつ!?!」

思わず、後ろヘザツと下がってしまいそのままバランスを崩してしりもちをついてしまった。

——っ!! 恥ずかしい

いくらチームを組むのは遠慮したい子でも、女子なのだ。
しかも、美少女。

そんな子の前で派手に俺は……！！

自覚してくると、一気に恥ずかしくなってしまう顔に血が集まってくる。

——どうしよう、どんな顔してるだろうか、

笑っているかもしれない、或いは呆れているかもしれない、

女子にあまり免疫がない俺は顔を上げれずにいた。

かと言って、その場を離れる事も出来ない。

——《ヘタレめ。》

胸の奥から低く、凜と届いた声音は間違いなくおれ自身の声。

だが俺とは違う意志を持って発生するその声の主は、もう一人の《おれ》で。

「っ、」

気持ち悪い、胸に響くこの声音も、顔を上げねずにいる俺自身も。

ぐるぐる思考が回る。

視界さえも回っている錯覚。

気持ち悪い…。

「おい。」

ハスキーな声がぐるぐる回る思考を遮った。

「っは、ね、ね、こ…?」

二足歩行…してる、猫…

「っあ、」

思考回路がゆっくり回りだし、勢いよくあげた顔に写ったのは、泣

き出しそんな榊原恵の顔。

「え、あ、ど、」

一気に思考がクリアになって、さっきとは違ったぐるぐるが襲う。

「ごめんっ！ あ、ちょっとびっくりしただけで、その…嫌だったとかじゃなくて、」

とりあえず口走る言葉に文法など関係なく、ただの単語と単語の羅列にすぎないものが口からとめどなく溢れる。

ただ、笑ってほしくて。

その思いだけが、あまり話さない俺の口を動かし続けた。

「だから、その、」

「…あ、の…」

更に続こうとしていた単語の間に、あの高めの声が静かに割って入る。

「は、はい。」

「…分かり、ました。…あり、がとう。」

ふわりと微笑んだ、その笑顔は今まで見てきた中で一番綺麗なものであった。

「あ。」

だから、俺は言ってしまった。

言うつもりだった言葉とは全く逆の言葉を。

——俺と、チームを組んで、くれませんか？

「は、はいっ！」

「ふむ。仕方ない。我はカーティル・ミィ・ヨンラ。以後よろしく頼む。」

「いや、お前は別に、」

「長い名前、ですね…カーティ、ル…すみません、なんでしたっけ？」

「ミイで良い。」

「では、ミイさん。」
「うむ。」

「わたしは、榊原恵です。…技術は、に、忍術…もどきです、」

「…おれは、鷹木悠。技術は剣術だ。」

休憩所執筆 第三話（後書き）

くやつとヒロイン出せた！

あと、ストーリーも進められたのでよかったです…。

これからも頑張りますので、チームカルテットをよろしくお願いします！ 休憩所

葦沢亀執筆 第三話

「……着いた、よ」

カルミアの、真面目なボソツとした声で、到着を知った。瞼を開ける。一迅の風が俺に纏わりついて、後ろへ押す。自然の匂いが肺を満たす。思わず一步後ろへ下がると、ファサツという感覚が靴の裏から伝わってきた。そこが草っぱらだった。見れば、俺の脚の脛スネをナズナが撫でている。小さい頃と同じ、あのナズナがここにもいるのだ。

「再会」

いつもそこにいれば、

それはただの雑草だ。

ひよんな所で出逢えば、

それは旧知の友人だ。

後で忘れずに手帳にメモっておこう、と頭に刻みつけて、現実へ戻る。すでにカルミアは辺りを勝手気ままに探索していた。一体さっきの真面目そうな声は、どこへ隠してしまったのだろうか。

俺が今立っているテレポーターの前の辺りは石畳で舗装されているが、それは5歩ほどの範囲で終わっている。その先には、風に撫

でられて波打つ雑草の大海原が広がっている。カルミアはその縁^{フチ}をなぞるように歩いて、一つ一つの雑草にあり余った興味を向けていた。でも、絶海の孤島に投げ出された漂流者のような、何となく彼女らしくない歩き方なのは、気のせいだろうか。

この辺りは、人のいた頃は恐らく公園だったのだろう。未だに残っている当時の面影は、まるで俺達を待っていたかのような。ブランクは座る所が見当たらないが、両脚の部分が錆びてもなお立ち続けている。ジャングルジムもある。蔦が巻き付いて埋もれてはいるが、まだ原形がかるうじて分かる。

「ねえ、君。あれって何の遊具だろう？」

好奇心に任せてカルミアが指を指す先には、雑草の間から赤いトゲが一本、スツと生えている。根元の方はよく見えない。

「何だろう？ 知らないなあ。竹馬よりは短いけど……！？」

それは突然だった。何の前触れも無く、いきなりトゲが真上に突き上がったのだ！ それは、次の瞬間には草原の中を、目が追いつかない程の速さで駆け回り出した。

「きゃああああ！！！」

そんなカルミアの悲鳴を楽しむかのように、赤いトゲは波打つ草原から頭だけ出して、石畳の上の俺達の周りを回遊する。まるでサメの映画でも見てみたいじゃねえか、畜生。ほんの一瞬、草の間から根元に茶色い丸いものが見えた気がしたが、定かではない。と言うより、そんなことに気を回している余裕は無かった。どうやら赤トゲは舵を切ったらしいのだ。此方^{こうち}へ迫ってきている。それもあつ

ちで頭が見えなくなつたかと思うと、そつちから顔を出したり、突如動きを止めてみたり、と俺達の様子を面白がりながら徐々に距離を縮めてくるから性質タチが悪い。カルミアを後ろへ庇かはうように、動きに合わせて細かく立ち位置を変えてはいるが、いつ予期せぬ方向から飛び出してくるかは分からない。戦闘などしていないのに、既に呼吸が早くなっていた。俺はこういうのに向いていないと実感する。

不意にカルミアが「あ」と言った。

「どうしたの？」

「いや、何だか可愛いような……」

「じゃあ、ペットにでもする？」

そんな下手な冗談を口にしながら、俺は焦って目を左右に走らせていた。カルミアに気を取られたせいで、トゲの行方が分からなくなつたのだ。360度、どこにも見当たらない。草花を掻き分ける音も聞こえない。

風が雑草の上を滑っていく。緑一色。時間が止まったような感覚になる。

息をのむ。全身で、時が動き出そうとしているのを感じた。無意識に、拳を握りしめて身構える。

風が止んだと同時に、草原から影が飛び上がった。太陽の光を茶色い毛並みが反射する。うっかり手で顔を覆いそうになったが、それはやや離れた石畳の上へ着地した。

赤いトゲは、どうやらツノだったらしい。ユニコーンのように額から真上へ伸びているが、残念ながら体はもつと小さかった。ウサギのような顔をしているが、尻尾はタヌキに似た長いフサフサの二股で、その先には目玉のような紋様がある。それをユラユラと揺らしながらこちらに向けているのだから、当然こちらを威嚇しているのだろ。フーツ、フーツ、という荒い鼻息が聞こえてくる。

さあ、戦え。自分で自分に命令する。腰に付けた鞘から、ゆつくりと剣を引き抜いた。時代劇で見たようなカッコいい抜き方をイメージしてはいるのだが、何度練習しても、どうにも様にならない。それにコレは、いわゆる「新人生向けセールス品」と呼ばれるシロモノで、POPには「初心者でも使いやすい！」なんて書かれていたのを買ったのである。普通に能力が使えればこんなもの要らないのだが、不運なことに俺はコピー能力の使い方を知らないものだから、これが無いとどうにもならないのである。とはいえ剣術が身についている訳でもなく、見かけ倒しの構えを見せる俺の戦闘能力はゼロに限りなく近かった。

ふと、今の自分がRPGの主人公だったら、と考える。きっとイベント発動の絶好のタイミングだ。カッティンが入り、突如全身に満ちる生命エネルギー。そしてコピー能力の発動だ。……って、ここで発動しても何をコピーするんだよ。カルミアの能力か？ そう言えばカルミアの能力は知らないが……使える代物ではないよな、きっと。となると、救世主の到着でも祈ろうか？ まさか、そんなことあるはず――

「ちよおつと、待ったああ！」

俺と魔獣の間に突如割って入ったのは、赤髪の少女だった。空いた間を、草の擦れる音が埋める。彼女は、ショートヘアを揺らしな

がら右と左、つまり魔獣と俺とを順番に見る。共に動きが止まったことを確認すると、やっと安心したのか、

「フウ、間に合った」

と額の汗を拭いながら、脚の力を抜いて地面に座り込んだ。草むらの中を走ってきたのだろう。足には無数の引っかけ傷があったが、新しいものばかりでもないらしい。

一体イベントの発動条件の鍵はいつ揃ったんだ？ 俺は首を傾げるしかなかった。

しばらく、空気が止まった。誰だ、この人は？ その問いを声にしようとしたが、直前で言葉を差し替えた。赤髪の少女の肩に、赤いツノの魔獣が飛び乗ったのだ。

「危ない！」

「ん？ ああ、リチュンのこと？ 平気よ、この子」

「いや、平気って、そりゃ無いでしょ」

呆れて言葉も出ない。だが、現実にはこの魔獣は鼻の頭を撫でられて、眼を安らかに閉じている。その姿は、日向でくつろぐ猫に似ている。どうやらツノは伸縮自在らしく、今は小さく収納されていた。全く、どんな体をしているのだろう。『解剖してやろうか？』と、心の中で悪態をつく。気付けば、いつの間にやらカルミアも、「カワイイッー！」なんて言いながらそれに加わっていた。

「ええっと、あなたは魔獣を魅了する能力、とかですか？」

と、思いついたままを言ってみる。

「何それ？ アンタ、面白いこと言うじゃない。そんなご立派な能力、私が持つてるように見える？ ねえ、リチュン。この人に教えてあげなよ」

リチュンと呼ばれたその魔獣が、「チュンツ、チュチュン、チュン」と鳴いて答える。まるで彼女の指示に従って、本当に俺に向かって喋っているようだ。

「それは、何かの芸ですか？」

言った途端、ふと何かが眼前に向かって来た。咄嗟に後ろへ仰け反って避ける。

「リチュンを怒らせちゃダメよ。この子、結構プライド高いから」

半分笑いながら、赤髪の子が言う。そして気付く。俺の鼻の先に、赤いツノの尖った先端が触れていた。もし反射神経が少しでも鈍かったら、俺の顔は今頃ドーナツ状になっていたに違いない。寸止めしてもらった、という可能性も無くは無いのだが、それは悲し過ぎるので考えるのはよしておこう。

「な、何なんだよっ！ 人間の言葉が分かるとでも言うのかよっ！」

言ってから、負け惜しみにしか聞こえないことに気付いた。だが、実際負け惜しみなのだからしょうがない。

「ご名答。ま、今は私がけしかけたんだけどね」

そしてまた、赤髪を揺らしながらクスクス笑う。って、けしかけたんかい！！

「ねえ、国はどこから？」

不意にカルミアが尋ねた。そう言われてみれば、彼女の顔立ちは日本人とは明らかに違う。何で気付かなかったのだろう。このところずっとハーフのカルミアと過ごしていたせいだろうか。それとも日本語が堪能なせいだろうか。

「ウェールズよ。日本人にはイギリスと言えば分かりやすいかしら？　そう言えば、自己紹介がまだだったわね。私はソニア・ベル。ソニアって呼んで頂戴」

こちらからも簡単な自己紹介をして、そして尋ねた。

「外国生まれなのに、なんで日本語そんなに上手いの？」

そこでソニアはちょっと胸を張りながら言った。が……心なしか胸の辺りが寂しい。

「あら、言っのを忘れてたわね。実は私の“能力”なの。どんな生き物とでも会話できるのよ」

「ああ。だからこの魔獣とも話せるのか」

「でも話せるだけだから、戦うのは専門外なのよね。そもそも戦う

気なんて無いし」

そう言ってソニアは笑うが、このアカデミーにそんな考えていられるとは到底思えない。俺だってできればそうしたいけれど、それではさすがに生活ができないのだ。食べ物とかは、ノルマを達成したりすると貰えるポイントで買わなければならない。

「でも、生活はどうするのさ？」

言ってから、ちょっと後悔した。途端にソニアの笑顔に元気が無くなったからだ。確かに、ソニアにとってそれは答えづらい質問かもしれない、と今更思っても仕方ないのだが。

「うーん……、実は恥ずかしながら養ってもらってるんだ。寮の同室の子にね。今も一緒に来ているんだけど」

「今も？ どこに？」

ソニアは何か理由があるらしく、苦笑いでやり過ごそうとするが、俺とカルミアの熱い視線に折れて、顔を赤らめながら重たい口を開いた。

「……それが、その、はぐれちゃって、さ……」

そう言っつて、ソニアは赤髪を弄る。

「つまり、迷子？」

カルミアが聞き返したが、すぐにソニアは弁明し始めた。

「いや、別に方向音痴とか、そういうんじゃないのさ。今回はたまにたまというか……」

そこで俺とカルミアは見合って、堪え切れずに笑い出した。

「な、何よ！ 迷子じゃないってば」

と、そこでどこからか、ギャウオーンという、ちょうどゲームでモンスターを倒した時のアレに似た叫び声があがった。同時にソニアは「ヒッ」と青ざめた顔を露わにして、その場にしゃがみこんだ。隣にいたカルミアは、心配そうに一緒にしゃがんで、ソニアの顔を覗いた。

「どうしたの？ お腹痛いの？」

カルミア先生、ここに来るとはさすがです。なんてツツコンでる場合じゃねえな。俺も急いで傍に駆け寄って、大丈夫か、とソニアに声をかける。しばらくは縮こまってそのまま震えていたが、やがて落ち着いてきたらしく、何とか体を起こせるようになった。顔の色が髪の色に近付いてきたところで、切り出す。

「もしかしてだけど、さっきの叫び声がどうかしたの？」

案の定ソニアの顔が一瞬陰るが、隠し通せないと踏んだのか、さっきよりもずっと力の無い声で答える。

「さっきの声、魔獣の声だった。……『死にたくない』って、言ってたんだ」

そうか、さっきのは本当に魔獣の断末魔の声だったのか。まるでさ

つきの俺は、鏡の中の自分をバカにしていたみたいじゃないか。俺は自分に失望した。

ソニアは氣力を振り絞って、少し、また少しと言葉を絞り出していく。それに同調して、綺麗な滴がソニアの眼から零れ落ちる。

「あのさ、魔獣ってさ、時空の歪みから、迷い込んできたんだ。来たくて来たかったわけじゃないんだよ。それなのに、人間が身勝手に殺しちゃうだなんて、そんなのどうかしてる。私にしか聞こえないけどさ、この気持ちなら、あなただって、みんなだって、分かるはずなのに、なのにな……」

ソニアは、それだけ言うのにもたつぷりと時間をかけた。さっきまでの氣が強そうな彼女はそこにはおらず、ただ自らの無力を嘆く少女が代わりにいた。

それにしても「来たくて来たかったわけじゃない」か。誰かさんも昨日そんなことを手帳に書いてたっけか。昨日を思い返しながら、俺も魔獣と会話できたらしいのに、と素直に思った。断末魔の叫び声が聞こえたつていい。何も変わらないだろうけれど、とにかく話をしてみたかったのだ。

その時だった。

「泣くなよ、ソニア。君が泣いても、何も始まらないんだからさ」
知らない声がした。どこから？　すぐそこだ。そちらへ目を向ける。
いるのは……リチュン、ただ一匹だった。

「うん。そうだね、リチュン。泣いてばかりじゃダメだね」

ソニアの言葉で、徐々に頭の中が整理されてきた。俺は今、魔獣の
声が聞こえているのではないか？ どうしても確かめたくて、思っ
ついたことを言ってみた。

「なあ、リチュン。お前、メスじゃなかったのか？」

途端に、俺はまたしても後ろへ仰け反ることになったが、それは予
感を確信するのに十分だった。

「とりあえず、オスだのメスだの、“動物”呼ばわりは止めてくれ
ないかな？ これでも傷つきやすい“男子”なんだよ」

何てこった。これが、俺の能力か。

葦沢亀執筆 第三話（後書き）

最後までお読み頂きありがとうございます。

書いた後で、展開早かったかなあ、とちよつと後悔……。
リチュンのツノが飛んでこないことを祈っています。

近いうちに作者4人の同時イベントがあるので、お楽しみに！

影雅羅尉弥 3話（前書き）

今回短いです……。

あ、改名しました！ 元「戸山羅花」です

影雅羅尉弥 3話

「……ほれ」

「？ 何なの？ これ」

「一応お前がいなかった分の授業ノートだ。明日返してくれればいい」

少々乱暴気味に榎原に手渡す。

「おお……。影原君って意外にマメなの……」

ノートをばらばらめくりながら榎原が言う。

「意外とか言うな！ つか、それは先生に頼まれたただだし……」

「うんうん。分かってるなの。影原君はツンデレなんですよねぇ」

「な・ん・で・そ・う・なるっ！」

「とにかく、ありがとうなの。遅れずに済みそうなの」

「おう」

会話が一段落する。すると、榎原が首をかしげる。

「あれ？ ……もうお昼休み……なの？」

「そうだな」

「えっと……私のお弁当は？」

「……取ってくる」

「酷い！」

榎原が涙目でいう。そこまで露骨に悲しむか。

「いやまあ冗談だ。ちゃんと持ってきてるから」

「うんまあ分かってたなの」

さっきの態度が嘘のようにケロッとして言う。

「そうきたか！ ちょっと可哀想とか思っちゃったよ！」

「なら作戦成功なのー」

「おまえなあ……。まあ、今回は俺が悪かったか。……ほらよ」

「ん、ありがとなの」

榎原が弁当箱のふたを開ける。

「つてやつぱり昨日の残りか！」

「だって私作れないから」

「諦め早いなおい！もちっと自分で作る努力しろって！」

「なら影原君手伝ってよ」

「いや俺いつもそう言ってるしな。大丈夫なの〜とか言ってやらなかったのお前だろ」

「……」

突如榎原が無言になる。俺何かしました？

「……あ」

「ん？」

「そういえばそろそろ戦闘訓練とかいうやつがあるらしいなの」

「思いつきり話題変えたなお前」

榎原がポケットから「ITA」を取り出す。因みに「ITA」とは「Information Transistor Automatic」の略です。嘘です。

「えーっと……。ほら、ここなの」

「あ？ あー……ホントだ」

確かに行事一覧にはそう書かれている。

「戦闘訓練ねえ……面倒くせ……」

「じゃあ影原君はきつと早死にで棺なの」

「早死にから棺にどうつながるかかわかんが、とりあえずバ力にするだろ」

「じゃあ火葬場なの」

「突っ込むところはそこかよ！……はあ。で？ その戦闘訓練とかいうやつがどうかしたのか？」

「実はその戦闘訓練、三人以上のチーム戦なの」

榎原が鷹揚にうなずく。

「そうか……じゃあ、大柳と……はあ」

「なんでため息つくなの！」

「いや……うん、そうだよな。サポーターは必要だよな」

「まるで自分に言い聞かせるみたいに！」

流石に可哀想なので、この辺でからかうのを止めておく。

「嘘だ嘘。榎原もだな」

「やった！」

「あーはいはい良かったなー。さて、俺は弁当買ってこないと……」

「そんな時間あったっけ？」

「え？」

時計を確認。残り後十五分。

「お前が戦闘訓練なんて話するからこんな時間経ったんだー！ どう考えても今からじゃ間に合わないだろうが！」

「んー……そうだ！」

何か思いついたように榎原が手を打つ。

自分の箸を構えると、ミートボール（昨日の残り）をレタス（適当にちぎったらしい）に綺麗に包んで俺に差し出した。

「うん。それアウト」

「！？」

「いやなんでお前そんな驚けるんだよ！ そんな無言で箸向けられなくても食えるかよ！」

「え……じゃあ、あーんと言ったほうが良かったなの？」

「問題はそこじゃねえ！ つか、それさっき思いつき口つけてたじゃねえか！」

「大丈夫なの！ 私は気にしないから！」

「お前は良くても俺は駄目なんだよ！」

叫び過ぎたのと恥ずかしさで息が切れる。なんか最近榎原怖いよ。

「でも影原君食べないのも駄目なのよ？」

「まあ、それもそうなんだが……何か変わりになりそうなもの……」

「……こんなところで何してるんだい？ 君達」

突然ドアの方から聞き慣れた声がした。

「おう、どうした大柳。怪我か？」

「まあ、そんなところさ。君達は……ああ、ごめん。触れないでお

くよ」

「いやお前の予想は恐らく外れた」

「おやそうなのかい？ てつきり僕は――」

「ストオオオッブ！」

「ええ！？ 何！？」

大柳の口をコンマ単位で塞ぎ、それ以上の漏洩を防ぐ。危ない危ない。

「んー、でもさ、もう無駄じゃない？ 結構君と榎原さんが付き合ってる、みたいな噂は広まってるよ」

「そうなんだよな……。全く……。榎原が否定しないからだ」

「私のせいじゃないなの」

そっぽを向いてそう返した。

「全く……」

「それより、影原君」

「あ？」

「もう授業始まるよ？」

「おっと。そうだったな。んじゃ榎原、また来るぜ」

「はいなのー。あ、影原君、このサンドイッチだけでも食べていけば？」

「そうだな。ありがと。じゃな！」

「またねーなの」

「……ごめん。僕には付き合っているようにしか見えないよ……」
「はあ！？ どこがだよ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1987o/>

学園戦記譚

2011年4月11日11時44分発行